

ふ せ づ か
布施塚 1 号古墳・2 号古墳

— 篠ノ井瀬原田地区都市対策砂防事業地 —

1 9 9 6 ・ 3

長 野 市 教 育 委 員 会

序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」が求められて久しい今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない必須要件の一つであります。また国民共有の財産でもあることは言うまでもありません。市民生活の充実、公共の福祉という目的を達成するために民間・公共を問わず多くの開発事業が実施されることとなりますが、その陰で失われていく土地に刻まれた歴史－埋蔵文化財－に対し、私達は保護・保存と活用という点において大きな責務を負っているといえましょう。

さて、ここに篠ノ井瀬原田地区都市防災砂防事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました調査報告書を『布施塚1号古墳・2号古墳』として上梓できましたことはご同慶の至りと申せましょう。しかし、開発側と文化財保護側との意思の疎通をきたしたことから、調査前に古墳を半壊してしまうという事態が生じてしまいました。この点を両者とも深く反省をし、布施塚古墳を保護する立場から今回の発掘調査の実施ということになりました。幸い当局及び地権者の皆様のご理解により、古墳は半壊ではありますが現状保存され、墳形も従来の姿に復され、布施塚古墳は今だに存在しています。調査では思いのほかに盗掘等による破壊を受けており、所期の目的は達せられませんでした。古墳の性格・内容を垣間見ることができ、貴重な資料を得ることができました。これらの成果は本報告書に記載してありますので、文化財に対する一層のご理解と地域文化向上のための一助としてご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力をいただいた長野県教育委員会文化課・土尻川砂防事務所・地権者・(株)小山田組、発掘調査に参加いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

長野市教育委員会

教育長 滝 沢 忠 男

例 言

- 1 本書は、長野県土尻川砂防事務所が施行する篠ノ井瀬原田地区都市対策砂防事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 調査地は、長野市篠ノ井大字布施五明字大平1711－1番地他に所在する。
- 4 本古墳群は、布施塚古墳と呼称されているが、本書では『長野県史（遺跡地名表）』に従い、墳丘の高い方を1号古墳とし、他を2号古墳とする。なお、遺跡台帳に登録されていない尾根先端に位置するものを3号古墳と呼ぶ。
- 5 調査は、現存可能な古墳であるため、破壊の状況・性格・築造年代等に主眼をおいた。
- 6 本書は、発掘調査等によって検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 7 現況地形図は、㈱三信測量に委託し、20cmコンターで作図した。旧態地形図は『長野県史（主要遺跡東北信編）』掲載図を使用した。
- 8 墳丘・石室等の遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準として、コーディックシステムを援用するため㈸写真測図研究所へ委託した。
- 9 遺構図は、1：80を基本として提示したが、石室等主体部は1：40である。
- 10 遺物図は、玉類を実寸、鉄製品を1：2、土器類を1：4で掲示した。ただし、玉類の実測図のうち、側面図を断面図として表示してある。
- 11 2章3節の将軍山古墳・海道北山古墳、3章1節の布施塚古墳の写真は丸山敏一郎氏が撮影したものを借用した。
- 12 遺跡の略号は、1号古墳が「FSKI」、2号古墳を「FSKII」とした。
- 13 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序

例 言

目 次

I 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の事務経過	3
3 調査日誌	4
4 調査の体制	5
II 調査地周辺の環境	7
1 地理的環境	7
2 考古学的環境	12
3 柳沢・有旅古墳群	16
III 調 査	19
1 調査地と地形	19
2 1号古墳の遺構と遺物	22
(1) 墳 丘	22
(2) 主体部	25
(3) 遺 物	30
3 2号古墳の遺構と遺物	31
(1) 墳 丘	31
(2) 主体部の構築	31
(3) 前庭部	38
(4) 主体部	38
(5) 遺 物	42
IV ま と め	47

挿 図 目 次

1 図	布施塚古墳群と砂防ダム事業	2
2 図	布施塚古墳周辺の地形図	8
3 図	地形分類図(長野市防災基本図)	9
4 図	表層地質図	10
5 図	布施塚周辺の字境図	11
6 図	川中島扇状地及び善光寺平南縁部の主要古墳分布図	13
7 図	川中島扇状地と千曲川自然堤防上の遺跡	15
8 図	柳沢・有旅古墳分布図	17
9 図	布施塚古墳群周辺地形図	20
10 図	布施塚古墳墳丘地形図	23
11 図	布施塚古墳地形図	24
12 図	1号古墳トレンチ等配置図	26
13 図	1号古墳断面土層実測図	27
14 図	主体部盗掘坑実測図	28
15 図	1号古墳2次盗掘坑出土玉類実測図	30
16 図	2号古墳平面実測図	32
17 図	2号古墳石室実測図	35, 36
18 図	2号古墳断面実測図	38
19 図	2号古墳出土土器実測図	42
20 図	2号古墳出土鉄製品実測図	43
21 図	2号古墳出土玉類実測図	43

I 調査の経過

1 発掘調査に至る経過

布施塚古墳は従来より前方後円墳と目され、有^{うたひ}旅・柳沢地域に存在する古墳群の中でも盟主的な古墳と考えられてきた。また長野県史編纂事業による墳丘測量の結果、円墳が2基接して構築されている可能性が高いことが指摘され、中期に属するものか後期古墳であるのか時代的にも注目されていた。

平成7年3月19日茶臼山動物園に来園した市民から、帰りの際布施塚古墳で工事が実施され横穴式石室らしき石材が露出している旨の連絡があり、翌日青木主査・飯島主事が現地に赴き破壊状況を確認した。事業は長野県土尻川砂防事務所による砂防ダム建設事業による工事用車輛等の道路開削による破壊であることが判明した。この次第は3月23日付長野県教育委員会文化課長宛報告した「都市対策砂防工事に伴う埋蔵文化財の破壊について」の書類に詳しい。その経過と原因について時間を追って要約する。

3月19日の発見の経緯については前述した。3月20日、起因事業請負業者より事情を聴取。2月上旬に仮設の工事用道路として開削。工事終了まで現状を変更する計画はない旨の回答を得る。折り返し土尻川砂防事務所・県教委文化課に電話にて概要を説明し、追って協議の実施及び指導を依頼する。午後現地において県教委・土尻



I-1 調査前の布施塚古墳

(平成6年3月20日の布施塚古墳の現状。2号古墳において石室が横断され、断面に側壁・控積石が露出する。手前には側壁の構築石材と推定される大きな扁平石が6個集積されていた。大きさはほぼ同一で、奥壁に設置される鏡石用の巨石は認められない。墳丘には枯れた唐松と櫟(くぬぎ)等の雑木林になっており、下草に笹が一面に繁茂していた。)

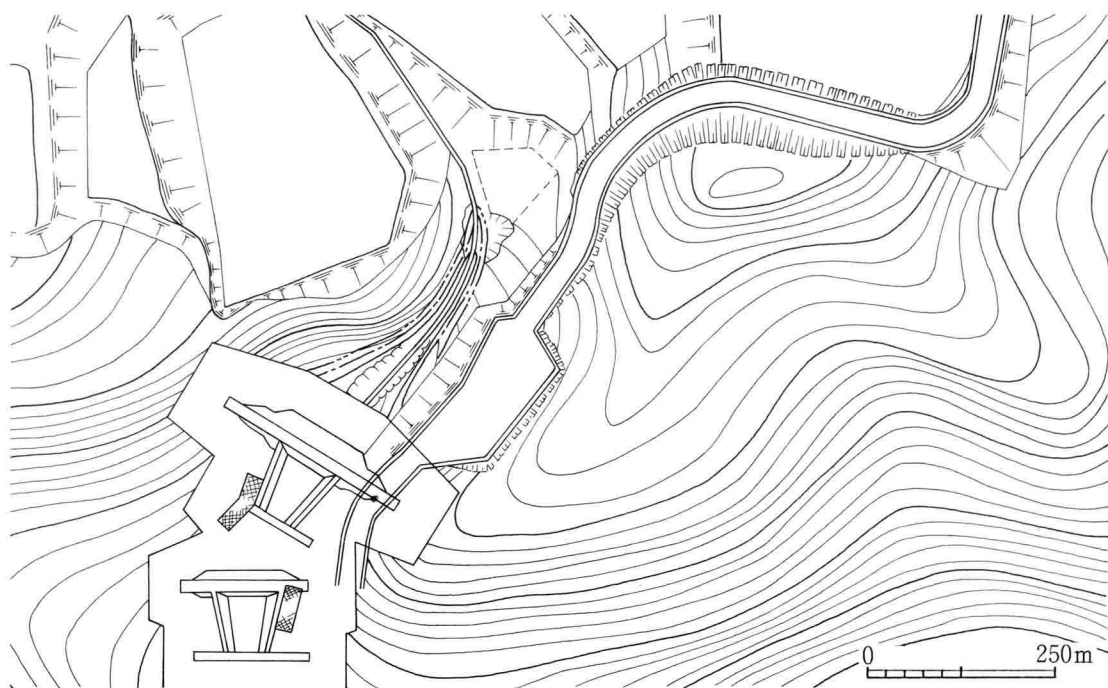
川砂防事務所と破壊状況を再確認し、今後の対応について協議する。

〔破壊の状況〕 円墳が東西方向に2基並列あるいは前方後円墳と推定される当該古墳の範囲中、主軸35mに沿って北側約半分(420㎡)が工事用道路により削平される。東側墳丘(2号古墳)では削平断面に石材を伴う埋葬施設が露呈、出土品としては大形石材が数点現地に保管されている。埋葬施設は横穴式石室あるいは横口構造の石棺形式と推定される。西側墳丘(1号古墳)では削平断面に埋葬施設の露呈は認められないが、旧地表と推定される黒色土層との上部に施された墳丘盛土(最大1m)が明瞭に観察される。埋葬施設は既に削平が及んで失われている可能性も指摘される。

〔起因事業着手前の保護協議の経過〕 平成5年度6月21日付、事業計画の把握と該当資料の提出を求める「平成6年度国道・県道・河川改修等に係る埋蔵文化財保護について(依頼)」がある。6月30日付土尻川砂防事務所長宛建設・土木工事に伴う全ての事業計画について照会する。7月7日付50000分の1の地図を添付の上、起因事業を含む18ヶ所について回答がある。7月16日付県教委教育長宛報告には、起因事業について該当しないものと判断し除外する。提出後、県教委より複数ヶ所に周知の埋蔵文化財包蔵地の近接が指摘され、事業計画の再確認を行うよう指導を受ける。

指導に基づき次の点を確認し、その旨を県教委宛に報告する。①砂防事業は、基本的に現況河川内での施工にとどまるため、近接する埋蔵文化財に影響を与える要素は少ない。②砂防事業に付帯する索道・工事用道路等は小規模かつ仮設であり、埋蔵文化財に影響する可能性は少ない。

〔保護協議経過における問題点〕 ①平成5年度事業照会・回答において破壊の直接原因になった砂防工事に付帯する工事用道路計画の存在に注意が及ばなかったこと。②事業の概要を示す図面が未提出であったこと。また図面提出について督促をしなかったこと。③添付図面の縮尺が大きく、遺跡分布図(1/10000)と事業計画範囲との照合時に不整合が生じたこと。④当該事業地における詳細分布調査が未実施であったこと。⑤地権者への埋蔵文化財認知の啓蒙が不十分であったこと。⑥平成7年度実施事業計画が未提出であったことと督促をしていないこと。



1図 布施塚古墳群と砂防ダム事業(1:1000)

3月27日 県教委より保護措置について新年度も事業継続であり、4月中に正式な保護協議を実施する旨の指示がある。崩落等が予想される箇所に土尻川砂防事務所と協議の上、シート・土嚢等による応急的な防護を施す。

4月12日 県教委文化課において発掘調査対象・体制等保護措置について協議する。

5月9日 県教委文化課・県土木部砂防課・土尻川砂防事務所と協議を実施し、以下のことを確認する。①開発側と保護側に前記した保護協議経過における問題点があったことを認識し、双方で積極的に保護姿勢を示し、再発を防ぐ体制作りを進める。②地形測量・断面記録等の破壊状況を確認し、墳丘・石室等の残存する部分の記録作成を目的とする発掘調査を実施する。③調査費は土尻川砂防事務所で負担する。最大で500万円を見込む。④事業完了後は現状を復帰する。⑤その他協議事項とし、付帯工事について協議対象とし、今後事業周辺の遺跡分布状況を周知するよう努力する。

2 発掘調査の事務経過

5月15日付 文化財保護法第53条の3第1項の規定に基づく通知を県教育長宛に進達する。

5月19日付 文化財保護法第98条の2第1項に基づく通知を提出する。

6月15日付 長野県土尻川砂防事務所長と埋蔵文化財発掘調査委託契約書〔篠ノ井瀬原田地区都市対策砂防事業にともなう平成7年度埋蔵文化財（布施塚古墳）発掘調査委託業務〕を締結する。

6月15日付 ㈱小山田組と仮設トイレ等賃貸借契約書を締結する。

6月29日付 ㈱三信測量と地形測量等委託契約書を締結する。

7月12日付 ㈱写真測図研究所と墳丘・石室等測量委託契約書を締結する。



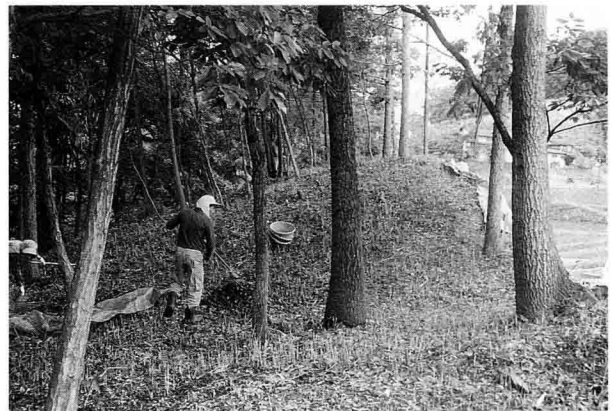
I-2 調査直前の布施塚古墳

（工事用道路によりほぼ東西方向にカッティングされてしまった。真横から見ると前方後円墳を想定させる。右のなだらかな墳丘を形成するものが1号古墳、左の小さな墳丘が2号古墳である。前面の水田は瀬原田地区の山腹斜面における唯一の水田群で東傾斜面の北端に位置する。）

6月19日～8月28日 発掘調査を実施する（実質稼働17日）。
9月6日～12日 石室内埋土水洗い作業を実施する（実質稼働4日）。
9月1日 県教育長・土尻川砂防事務所長宛に「発掘調査終了届」を提出する。
9月4日付 長野南警察署長宛「埋蔵文化財拾得届」「保管証」を提出する。
9月28日付 県教育長より「埋蔵物の文化財認定」を受ける。
1月8日～3月10日 遺構・遺物の整理、報告書作成作業を行う。
3月25日 発掘調査報告書を刊行する。

3 調査日誌

6月19日（晴） ミニバックホーによる残土処理等を行う。調査機器材を搬入・整備作業を行う。
6月21日（晴） 墳丘の下草刈作業を行う。
6月22日（晴） 下草刈を継続する。工事による古墳断面を清掃し、写真撮影をする。
6月23日（晴） 2号古墳の墳丘清掃、石室内の調査を開始する。
6月26日（雨） 作業中止。
6月27日（晴） 墳丘・石室内の作業を継続する。根石部・羨道部の調査を開始する。墳丘より玉砂利が数多く確認される。
6月28日（曇） 昨日の作業を継続する。石室内に角礫の混入が多く、羨道部覆土に平石が目立つ。
6月29日（晴） 石室内完掘後葺石とともに清掃し、写真撮影を行う。南側根石部を追求する。根石部外から鉄刀・鐔が出土する。
6月30日～7月5日 降雨等により作業を中止する。この間数回排水作業に出向く。
7月6日（曇） 石室内の排水及び崩落防止作業を行い一時2号古墳の調査を中断する。
8月17日（晴） 1号古墳の調査を開始する。墳丘に幅約1mのトレンチを3本設定する。
8月18日（晴） 主体部と推定される墳頂部の調査にかかる。トレンチ調査を継続する。
8月21日（晴） 調査継続。主体部推定地の攪乱が著しい。
8月22日（晴） 調査継続。主体部は2次以上の盗掘を受けている模様。2号古墳の根石部の調査を終了し、写真撮影を行う。本日より尙写真測図研究所による2号古墳の葺石・石室実測を開始する。
8月23日（晴） 調査継続。墳頂部調査区を拡張する。
8月24日（晴） 主体部周辺の調査を継続。攪乱土から管玉・ガラス玉の出土を見る。



I-3 6月22日（1号古墳）



I-4 6月29日（2号古墳）

8月25日（晴） 主体部周辺及びトレンチの調査後
写真撮影・土層実測を行う。2号墳墳丘の埋戻し
作業を行う。明治大学小林三郎教授他2名の指導
を仰ぐ。27日に2号墳における測量作業を完了す
る。

8月28日（晴） 1号古墳のトレンチ等測量後2号
古墳とともに埋戻し作業を行う。

8月29日（晴） 2号古墳石室の埋戻し作業完了後
調査機器材を撤収し、現地における調査を終了す
る。



I-5 8月17日（1号古墳）

4 調査の体制

（財）長野県埋蔵文化財センターにおける道路公団・鉄建公団に係る発掘調査を除き、長野市内の緊急発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

布施塚古墳における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝沢 忠男
総括管理者	長野市埋蔵文化財センター所長	丸田 修三
庶務係	所長補佐兼庶務係長	小林 重夫〔契約・出納事務・庶務〕
〃	職員	青木 厚子〔〃・〃・〃〕
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口 忠良〔発掘調査指揮・報告書作成〕
〃	主査	青木 和明〔事前協議担当〕
〃	主事	千野 浩
〃	〃	飯島 哲也〔事前協議担当〕
〃	〃	風間 栄一
〃	〃	小林 和子
〃	専門主事	清水 武
〃	専門員	中殿 章子
〃	〃	山田美弥子
〃	〃	寺島 孝典〔1号古墳土層実測〕
〃	〃	西沢 真弓
〃	〃	小野由美子
〃	〃	永井 洋一
〃	〃	堀内 健次
〃	〃	藤田 隆之
整理調査員		青木 善子〔遺構、遺物等製図・浄書〕
調査従事者	池田賢二・小林義光・塩野入仁一郎・曾根川好武・田中はま江 田中むつ子・富田景子・町田登吾	
基準点測量・地形測量業務委託	（株）三信測量	

墳丘・石室等測量業務委託 (有)写真測図研究所

調査関係者	長野県教育委員会文化課	係 長	丸山 敬一郎
		指導主事	百瀬 新治
		”	市村 勝巳
	長野県土木部砂防課	専 門 幹	塩入 正信
		主 任	荻野 厚
	長野県土尻川砂防事務所	課長補佐	原 肇男
		係 長	外谷 光雄
		主 査	小松八十治
(株)小山田組		代表取締役	小山田武久
		工 事 長	平林 登

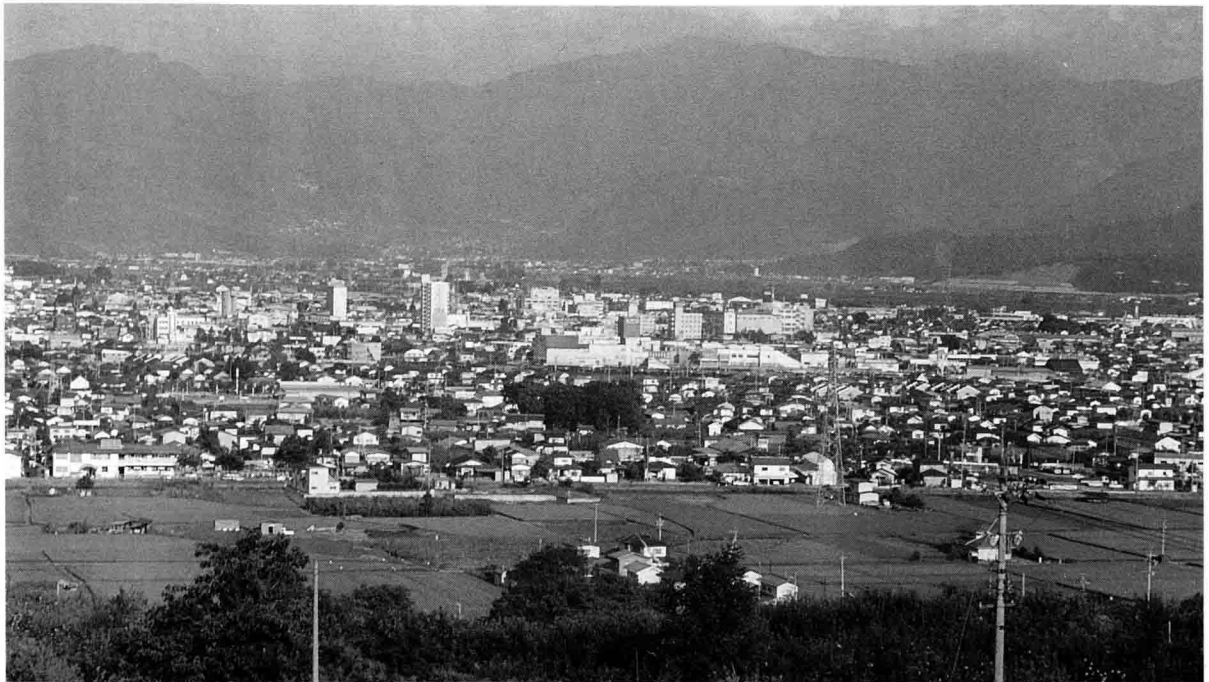
以上の方々の他に、地権者飯島俊英・富田 清両氏及び駐車場を提供いただいた福島松太郎氏には、何かとご迷惑をおかけした。記して感謝いたします。

Ⅱ 調査地周辺の環境

1 地理的環境

長野盆地の西縁を画するのは西部丘陵と呼称されている。その意味するところは盆地平坦面に対し西方の山地を表現しており、犀川流域における山地全体を指している。そのためか盆地西縁部の山塊に対し犀川丘陵地と地域限定の呼び方もある。犀川丘陵地は犀川と長野盆地の間にある山地で、丘陵地から河床円礫や貝の化石が認められることから、盆地床と相対隆起したものと考えられている。

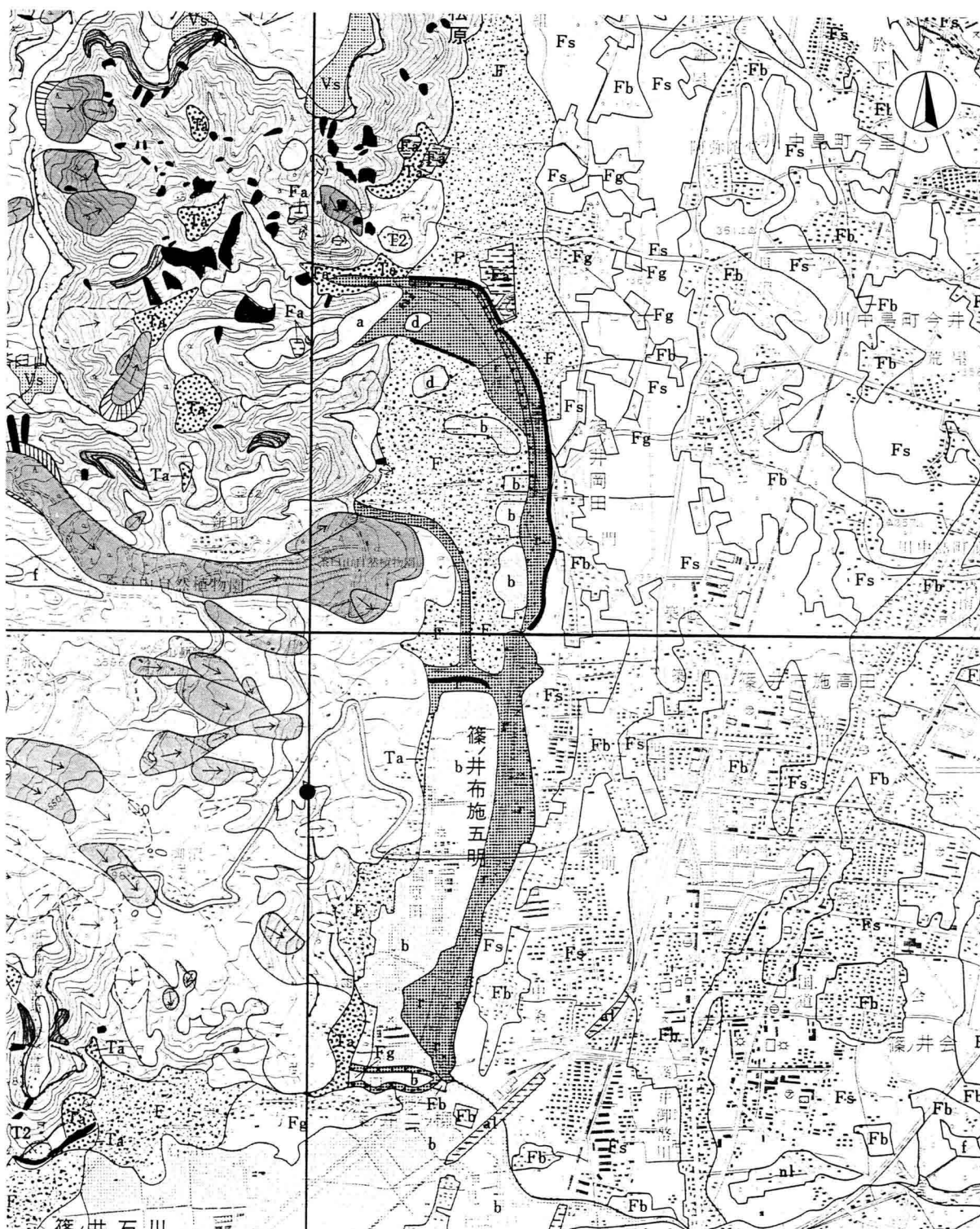
さて布施塚古墳の構築された周辺の地形を観察すると、川中島扇状地を形成する犀川を北とし、南に千曲川の後背湿地に注ぎ込む聖川の間に展開する山地がある。標高730mの茶臼山を中心として北に中尾山(668m)が山容を整えるのに対し、南側は火山性の篠山(907.7m)に至るまで際立つ山容は認められない。ことほどさように丘陵又は山地との呼称はうなずけるところである。中尾山と国史跡川柳將軍塚古墳が立地する湯の入山の等高線が山容を表現しているのに対し、有旅・柳沢に展開する古墳群の立地は等高線の乱れが著しいことに気付く(2図)。茶臼山は江戸時代から地すべりが始まり、大正年間には南峰(790m)が崩落し、近年まで地すべりが続いているという顕著な例からして、この地域は地すべりによる地形であることがうかがえる。また平坦地の接縁部は東側に張り出していることから根拠付ける。そのため盆地西縁の東傾斜面には水田がほとんど見受けられなく、果樹園としての地目利用が目立つ。一方、盆地側に目を移すと一見平坦地を思わせる扇状地が展開する。これは犀川が西部丘陵を浸蝕し、その堆積土により形成されたもので、犀口を頂点とし千曲川との合流点落合橋まで9.9kmを測り、比高差は40mである。この扇状地は北は長沼地籍、南は千曲川辺りの篠ノ井唐猫地籍に及んでいる。犀川右岸49.8km²、左岸21.7km²の面積を有する。扇状地内は古犀川が流下し、微高地と低地が網目状に展開する(7図)。布施塚古墳眼下にも古犀川の流路跡が認められ、御幣川の天井川化に伴い後背湿地となり、水田として地目利用されている(3図)。



Ⅱ－1 布施塚古墳より川中島扇状地を望む



2 図 布施塚古墳周辺の地形図（1：20000）



3図 地形分類図(長野市防災基本図)(1:20000)

F扇状地 b後背湿地 r天井川沿いの微高地 Fb扇状地内の微高地 Fs扇状地内の低地 Ta崖錐 Fg緩扇状地 nI自然堤防 →地すべり方向(明瞭な地すべり)

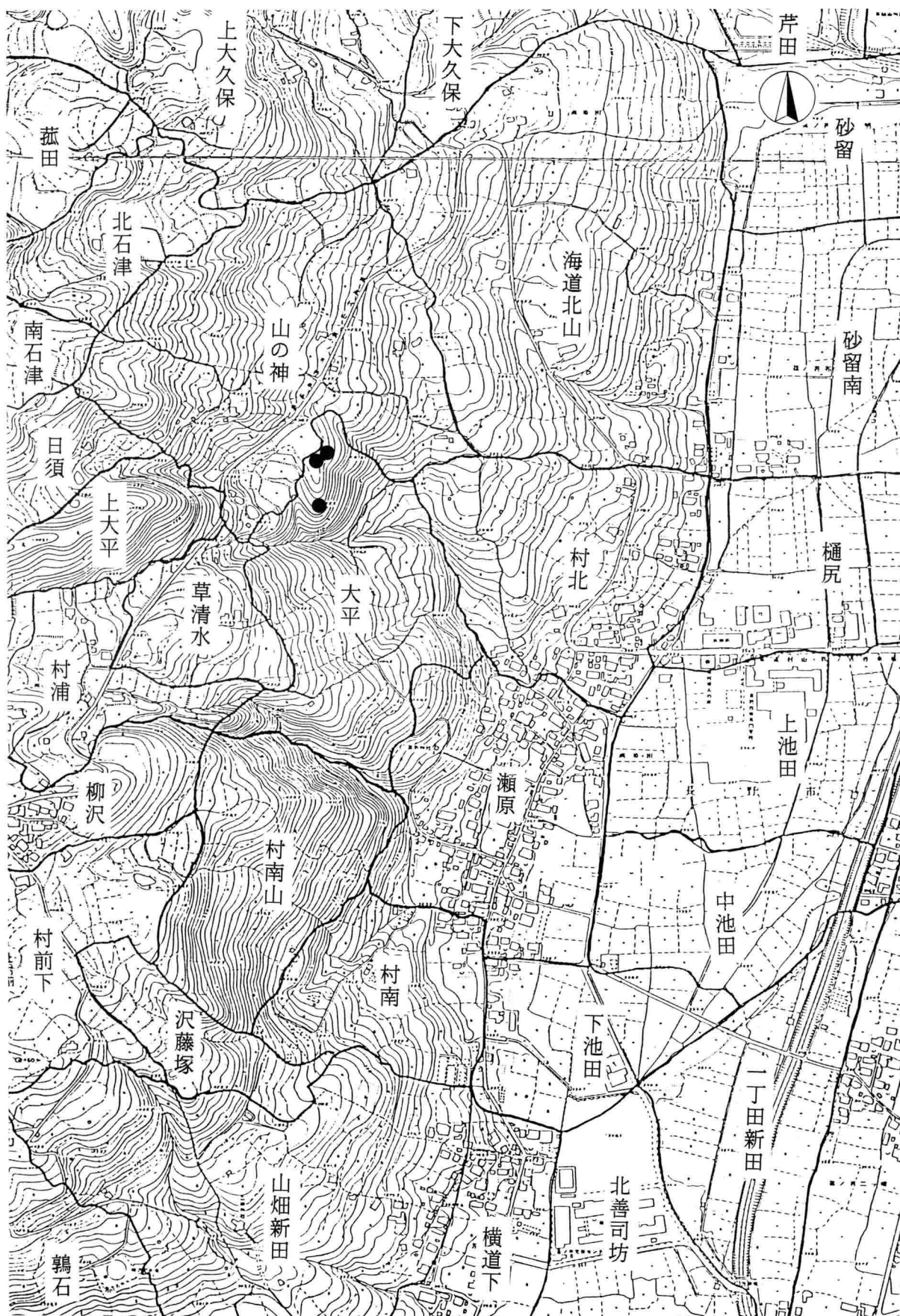
(布施塚古墳が立地する山腹は不明瞭な地すべり帯とされている。眼下に古犀川による後背湿地と天井川沿いの微高地が顕著で、また山麓部においても扇状地が発達していない点特色がある。平坦面では微高地と低地が交互に網目状に起伏する。)



4 図 表層地質図（長野市防災基本図）（1：20000）

Ti 角礫・砂・泥及び粘土（古期崖錐・崩積堆積物） Tu 角礫・砂・泥及び粘土（新期崖錐・崩積堆積物） Ty シルト・砂及び礫（豊野層） fa 砂及び礫（扇状地堆積物） fs 砂及び礫（大規模扇状地堆積物） bs 泥（後背湿地堆積物） Si 流紋岩溶岩及び凝灰岩（裾花凝灰岩層下部） Mn 砂・礫及びシルト（南郷層）

（有旅・柳沢古墳群が所在する一帯は、上～中部更新統期の半個体堆積物で角礫・砂・泥及び粘土により形成されている。上部に古期崩積堆積物が、山麓縁部に新期崩積堆積物が認められる。ちなみに長野盆地南縁における前期古墳のひとつである川柳將軍塚古墳・姫塚古墳は凝灰岩山塊上に構築される。）



5 図 布施塚周辺の字境図（約 1 : 7000）（長野県地名研究所作成）

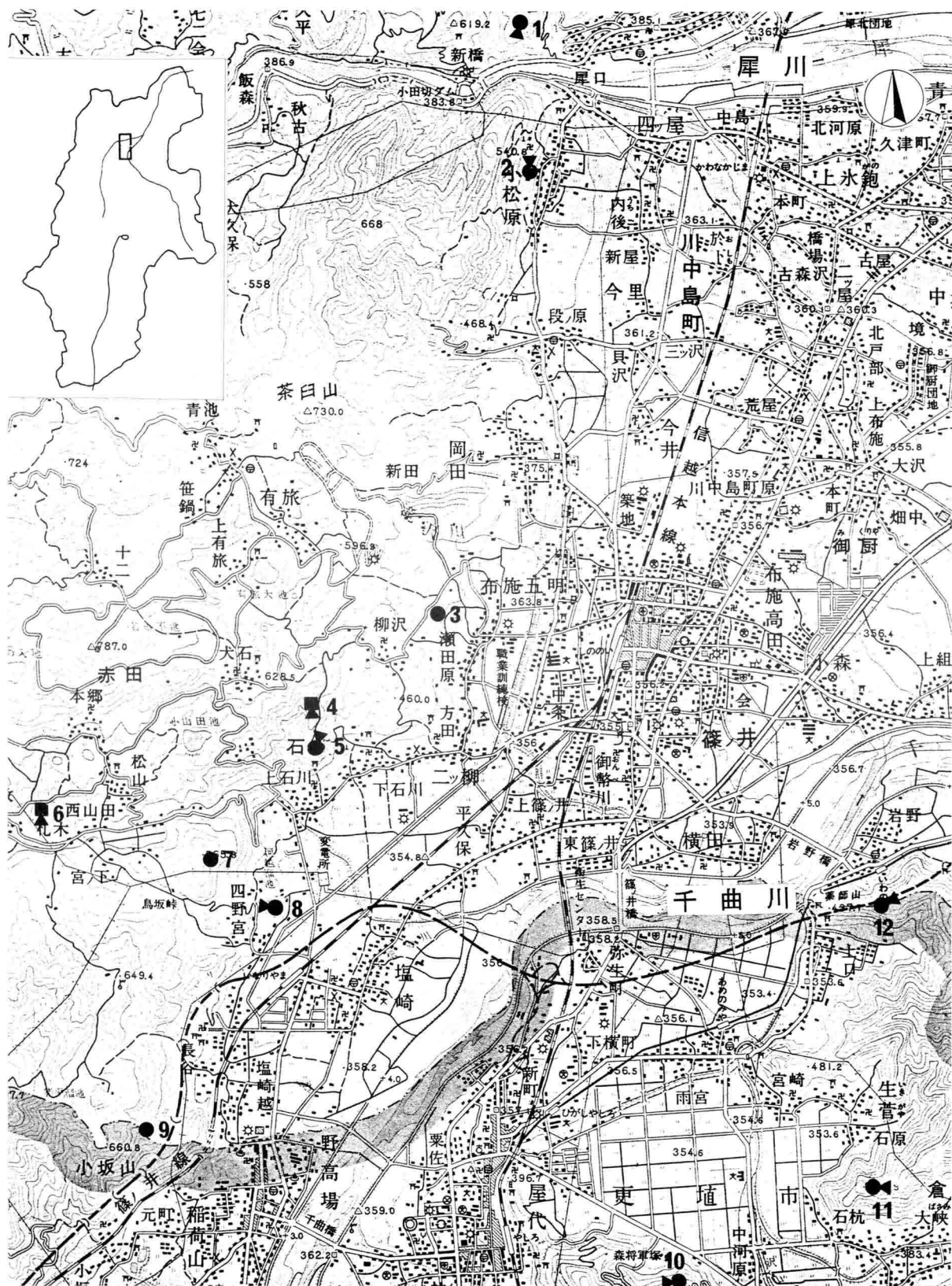
2 考古学的環境

川中島扇状地における原始・古代の遺跡を垣間見る時に、長野盆地南縁部の遺跡群と対応して観察すると大きな性格の相違があることがわかる。そこでその性格を浮き上がらせるために、まず長野盆地南縁部の様子を瞥見する（6図）。

長野盆地南縁部は千曲川によって形成された自然堤防と後背湿地が非常に良く残っている。自然堤防上には弥生時代中期から平安時代にかけて大規模集落が営まれ、後背湿地にはこれらの生活基盤としての数面に亘る該期の水田面が確認されている。千曲川左岸の遺跡には上流から塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群があり、右岸（更埴市）には栗佐遺跡群・屋代遺跡群が境を接して連なっている。後背湿地は石川田圃・屋代田圃と呼ばれる肥沃な水田面が展開しており、条里的遺構を残す遺跡として著名である。これらを取りまく標高450～500m、平坦地との比較差100m前後の山頂には「将軍塚」と呼称される古墳時代前・中期の大型古墳が築造されている。千曲川左岸では上流域から越将軍塚古墳・将軍山古墳の直径30mを越す円墳、中郷古墳・川柳将軍塚古墳の前方後円墳、姫塚古墳における前方後方墳があり、右岸には森将軍塚古墳・同じ山系に有明山将軍塚古墳、倉科将軍塚古墳・土口将軍塚古墳の前方後円墳が盆地に突出した尾根上にある。後期古墳も同様に底位山腹・山麓に立地を変えながら群集墳として形成される。塩崎沖積面に対して越古墳群（8基）・四野宮古墳群（16基）、石川沖積面では石川古墳群（18基）が対応する。右岸の埴生地区では東山古墳群（23基）が、森地区では将軍塚古墳群（9基）が、倉科地区では杉山古墳群（22基）・竹尾古墳群（15基）・北山古墳群（6基）の3群が、雨宮地籍においては生萱古墳群（4基）・土口古墳群（11基）がある。

一方、川中島扇状地に関係する遺跡に目を移すと、前者に比べあまりにも情報量が少ない。古墳では扇頂の山頂に馬神古墳が犀川の出口をおさえる要地に占拠し、下流域に5世紀代の所産と考えられる4基の真當沖古墳群が山腹山頂に構築される。犀川以南では扇頂部付近の山腹山頂に扇状地平坦部より比高約20mの位置に前方後円墳腰村1号古墳が築造され、墳裾から円筒埴輪片が確認され、6世紀代前半の所産と考えられており、長野盆地における最後の前方後円墳のひとつと推定されている。周辺に円墳2基が存在する。次にこの山系を代表する古墳になると布施塚に至る。腰村古墳から直線距離にして約4kmを測る。この間に境内古墳群（3基）の他に5基の後期古墳が点在する程度である。川中島扇状地に向かい東傾斜する斜面には柳沢古墳群（6基）と有旅古墳群（5基）が散在する。中でも布施塚1号古墳が墳形の規模からして盟主的な位置が考えられている。ただし、布施塚古墳から北東約400mの位置に墳頂が削平されているが直径30m級の円墳と推定される瀬原田古墳がある。石室・遺物等確認されていないため古墳であるかどうか見極め得ないが、古墳であるとすれば規模・位置からして布施塚古墳より古い年代が与えられる可能性がある。

さて、これらの古墳築造の背景になる集落跡は近隣では確認されていない。最も近い古墳時代の遺跡は本年度（平成7年度）に調査した上九反遺跡までない。山麓線から直線距離にして約3.5kmの扇央下部に位置する。この他の遺跡に田中沖遺跡・棗川原遺跡が存在するが、千曲川に近く、西麓部の古墳に関与しているものと考えより東麓部の大室古墳群と係わりが強いものと推定されている。該期の遺跡は犀川の洪水等により消失してしまったのか、堆積物の下深く眠っているのか今の所不明である。なお、平安時代に至ると犀川以南の川中島扇状地は文献においても遺跡においてもにわかに活況を呈する。曰く約50㎢に氷鉋・斗女・池郷の3郷が存在し、氷鉋斗賣神社・頤気神社の「延喜式内社」が鎮座する。平成5年度より調査を継続している南宮遺跡では後期を主体とする2,000軒近い住居址が確認され、近い将来川中島扇状地の歴史事象を一変する可能性がある。



6 図 川中島扇状地及び善光寺平南縁部の主要古墳分布図 (1 : 50000)

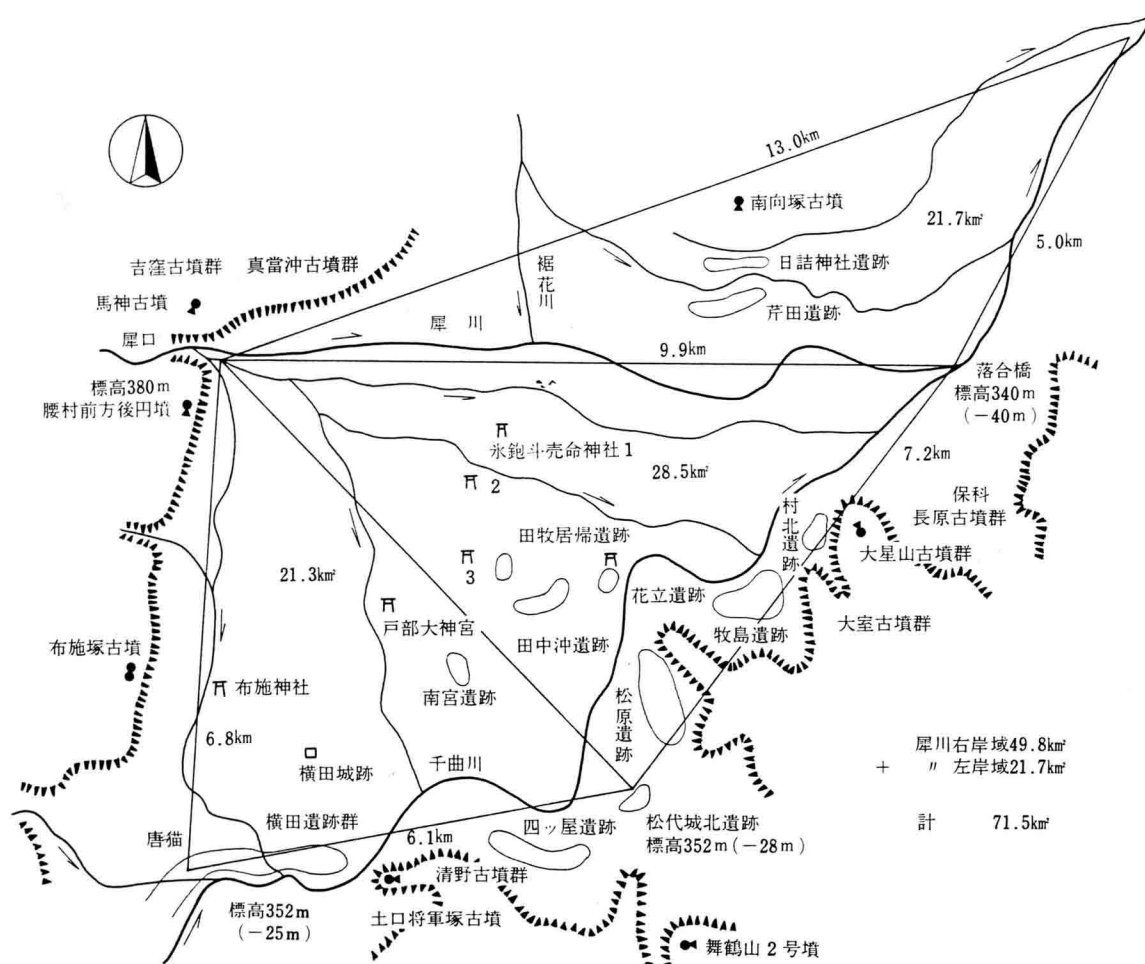
- 1 馬神古墳 2 腰村1号古墳 3 布施塚1号古墳 4 姫塚古墳 5 川柳將軍塚古墳 6 田野口大塚古墳
7 將軍山古墳 8 中郷古墳 9 越將軍塚古墳 10 森將軍塚古墳 11 倉科將軍塚古墳 12 土口將軍塚古墳

- 1 馬神古墳 標高539m、平坦地との比高差約180mの尾根上に立地する。墳丘全長30.5m、前方部長13.0m・同幅10.0m、後円部長18.0m・同幅18.0m・同高1.85mを測る。墳丘の主軸はN80° Eを指し、尾根の突出方向とはほぼ一致する。周辺に4基の円墳があり、2基が竪穴式石室で、1基が横穴式石室の主体部であることが確認されている。西田正規・東憲章「長野市小田切馬神古墳の測量調査」『信濃』39巻4号 昭和62年
- 2 腰村1号古墳 標高384m、山脚との比高差は約20mで、南北に延びる段丘上に立地する。墳丘全長43m・後円部径24m・前方部幅21m・後円部高4.5m・前方部高4m前後の規模と推定されている。蒲原宏行・高崎光司・滝山雄一「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』31巻12号 昭和54年、岩崎卓也「腰村1号古墳」『長野県史（考古資料編）』全1巻(2) 昭和57年
- 4 姫塚古墳 川柳將軍塚古墳が立地する湯ノ入山尾根中腹山頂にある前方後方墳で、墳丘全長32m、後方部幅17m・同長19.5m・同高3.5m、前方部幅7.6m・同高1.5m内外の規模である。主体部・遺物ともに未確認であるが、長野盆地の最古の古墳とも考えられている。岩崎卓也「川柳將軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史（考古資料編）』
- 5 川柳將軍塚古墳 姫塚古墳の下方200m、標高470mの尾根先端に構築される前方後円墳である。墳丘全長93m・後円部径45m・同高10m、前方部幅26m・同5m前後の規模で、墳丘は丘尾切断による。主体部は江戸時代に盗掘を受けておりその所見から、墳丘主軸線に沿って竪穴式石室が設けられ、長さ5.4m～7.2m・幅1.8m程の規模が想定されている。遺物に異体字日月銘内行花文鏡1面の他に、銅鏡5面・筒形銅器・琴柱形石製品・石突形石製品・硬玉製勾玉等が伝えられており、古式の様相を有する。4世紀代に遡りうる築造の可能性を有する盟主的古墳のひとつと考えられている。岩崎卓也「川柳將軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史（考古資料編）』
- 6 田野口大塚古墳 長野市信更町田野口にあり、千曲川の支流聖川に開析された山間盆地を眼下に望む山頂上に構築される前方後方墳である。標高は572m前後、盆地面からの比高差約70mを測る。墳丘全長40.5m、後方部長27m・同幅28.5m・同高4.85m、前方部長13.5m・同幅15.5m・同高2.8mの規模である。主体部・遺物等未確認であるが、古式に属する構築である。山田昌久・矢中隆「長野市田野口大塚古墳の測量調査」『信濃』39巻4号 昭和62年
- 7 將軍山古墳 石川田圃を見下ろす標高484.7mの薬師山山頂に位置し、平坦面までの比高差が130m程ある。直径32m・高3.9mを測る大形円墳であるが、主体部・遺物等は確認されていない。恐らく5世紀代の所産であろう。
- 8 中郷古墳 石川田圃に關与する前方後円墳のうち最も低位にある。標高395m、水田面との比高差35mにすぎない。全長53m、後円部径30m・同高4.5m、前方部幅24m・同高3.5mの規模と推定される。主体部・遺物等は不明である。5世紀代の築造と推定される。蒲原宏行・高崎光司・滝山雄一「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』31巻12号 昭和54年 岩崎卓也「腰村1号古墳」『長野県史（考古資料編）』
- 9 越將軍塚古墳 標高490mの篠山山腹山頂に造られた円墳で、平坦地と比高差約130mを測る。直径33m・高6.7mの規模で、幅5.4m程の周塹を有する。主体部は竪穴式石室であり、長さ6.2m・幅1.2～1.45m・調査時最深高1.5mである。遺物は滑石製小玉・鉄片・埴輪・土師器等がある。5世紀代の所産と考えられている。矢口忠良「越將軍塚古墳」『長野県史（考古資料編）』
- 10 森將軍塚古墳 屋代田圃をはじめ長野盆地が一望できる有明山尾根上に位置する。標高485m、水田面との比高差約130mである。長野県で最大かつ最古の前方後円墳である。尾根形態の制約から前方部と後円部が変形しているため主軸長は確定されないが、最大長99m、前方部長41m・同幅30m・同高4.5m、後円部長径55m・同短径44m・同高10mの規模になる。主体部は2段墓壇を有する竪穴式石室で、墓底面7.65m・幅1.95～2.15m・高2.0～2.3mを測る。主体部から三角縁神獸鏡片の出土が注目され、墳頂部には朝顔形埴輪や円筒形埴輪等が樹立され、墳裾には小型埋葬施設群がとりまく。昭和56年度から保存整備事業が実施され、平成3年

完成をみた。 更埴市教育委員会『史跡森將軍塚古墳』平成3年

- 11 倉科將軍塚古墳 屋代田圃へ東から突出する通称北山の尾根上にある。標高549m、水田面との比高差は約200mある。丘尾切断による前方後円墳で、墳丘全長73m、前方部幅36m・同高6.5m、後円部径35m・同高7mの規模である。主体部は盗掘坑から竪穴式石室と推定され、墳頂部には埴輪がめぐらされていた可能性が高い。5世紀代の築造と考えられている。 岩崎卓也『長野県史（考古資料編）』

- 12 土口將軍塚古墳 長野市と更埴市の行政区界薬師山が西へ突出する尾根上に位置する。標高450m、水田面よりの比高差は約100mである。墳丘全長67.7m、前方部幅30.5m・同高3.9m、後円部径40.5m・同高8.1mの規模を有する前方後円墳である。主体部は同時期共存したと推定される竪穴式石室が2基構築される。遺物には叩き技法による円筒埴輪の他に鉄鏃等の武器類、ガラス小玉、土師器等がある。これらから築造年代を5世紀前半に求めている。 長野市・更埴市教育委員会『長野県史跡土口將軍塚古墳』 昭和62年



7 図 川中島扇状地と千曲川自然堤防上の遺跡

上九反遺跡 稲里中央土地区画整理事業に伴う平成7年度の発掘調査により発見された集落跡で、古墳時代後期住居跡10軒、溝跡20条が確認されている。今のところ川中島扇状地内で最も上流部に位置する。

田中沖遺跡 神明広田土地区画整理事業内の道路建設部から49軒の古墳時代後期の住居址が確認されている。平面におけるトレンチ調査的なものであったので、総軒数は倍以上になるものと考えられる。

南宮遺跡 既調査面積約5ha中に、平安時代後半に属する単一の時期に限定される大集落跡が露呈しつつある。最終的には2,000軒を越す住居址群になるものと予想される。平安時代文献事象を裏付ける遺跡である。

3 柳沢・有旅古墳群

犀川丘陵地が茶臼山を主峰に長野盆地へ東傾斜しながら川中島扇状地へ至る地形上にある。地形的景観及び古墳群集のあり方から下方を柳沢古墳群、上方を有旅古墳群と呼称する（8図）。有旅古墳群は標高570～535mの比較的平坦地に展開する。『長野県史（遺跡地名表）』によれば7基の古墳が登録されている。

- 10 北石津古墳 長野市篠ノ井有旅北石津328にあり、有旅大池から約500m東の山腹丘上に存在というが、現在では果樹園の造成により壊滅する。管玉の出土が伝えられている。
- 11 六部塚古墳 有旅北石津320一〇にあり、円墳・横穴式石室があったというが、墳形等は見られない。古墳があったという位置に数基の道祖神等の石碑が立っている。
- 12 駕籠石古墳 有旅駕籠石492の山腹丘陵先端に位置する。横穴式石室を有する円墳と推定され、側壁の一部が残存する。
- 13 將軍塚古墳 有旅南石津119他の果樹園内にあり、横穴式石室が残存する。直径7.6m・高4.5mの円墳と推定され、石室長3.6m・幅1.2m・高2.0mの主体部で、やや胴張りしている（Ⅱ－2）。
- 14 南石津古墳 有旅南石津地籍の山林中にあり、古墳を取り巻くように県道村山篠ノ井停車場線が迂回する。円墳で横穴式石室と推定される。

有旅古墳群は比較的平坦で舌状台地様地形であることから起伏部は果樹園、緩斜面は水田として地目利用が古くからなされ、そのほとんどが壊滅状態にある。墳丘・主体部とも小規模なものと予想され、古墳時代後期後半期の築造と考えられる。

柳沢古墳群は古期崩積堆積土地形上の東傾斜面に散在する。斜面南縁の方田地籍山麓に占地する山畑新田古墳・藤塚古墳は後背湿地の石川田圃との係わりある可能性がある。地すべり地形上の古墳は小規模な沢によって区画された山腹平坦地や山頂を思わす台地先端に占地する。

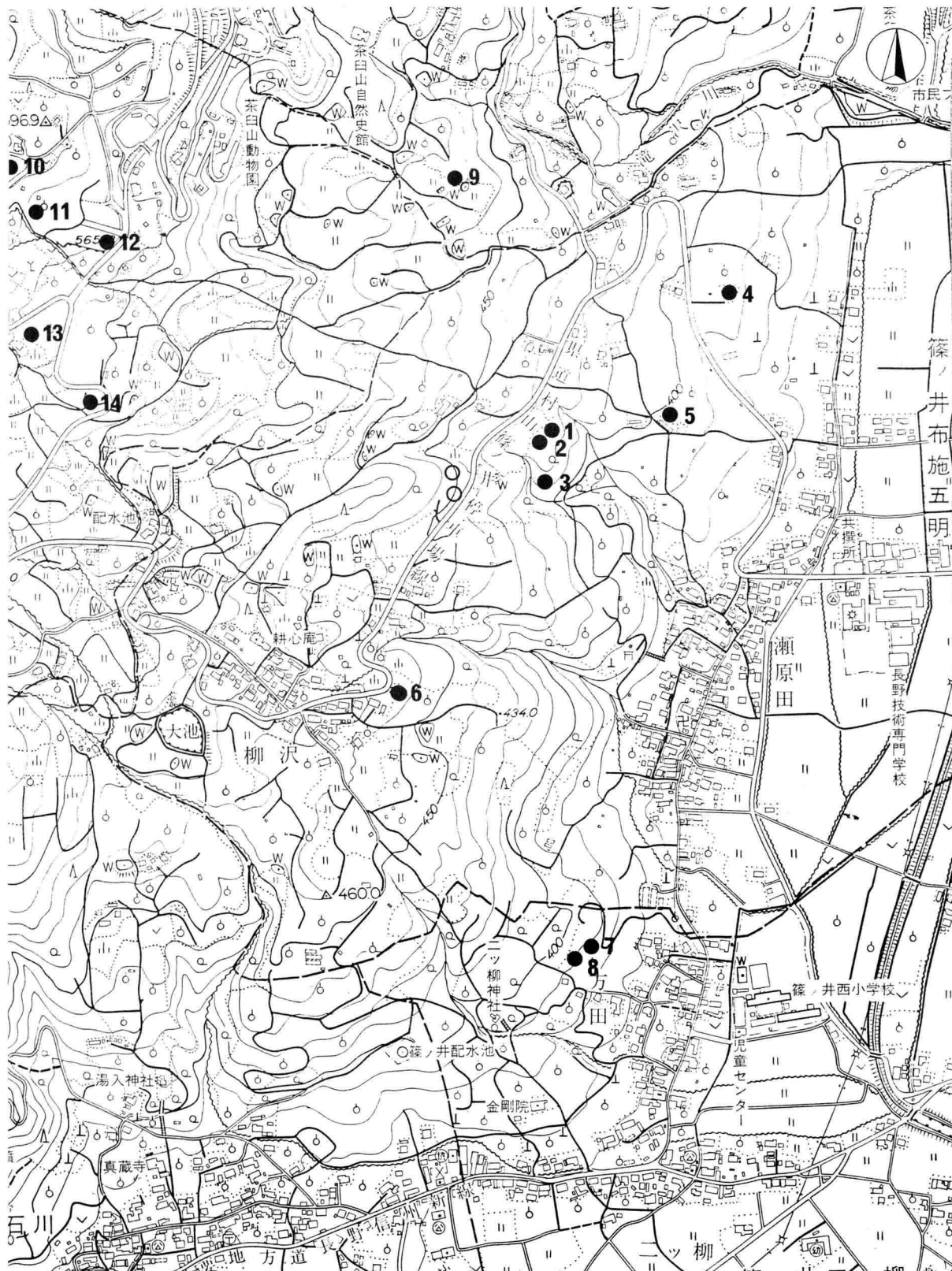
- 3 布施塚3号古墳 布施塚1・2号古墳の立地する尾根から更に南東に突出する小尾根先端に位置する。直径10m・高さ1.5mの規模と推定される。主体部は不明である。
- 4 瀬原田古墳 柳沢古墳群内で最も低位にあり、篠ノ井布施五明海道北山1340に所在する。平坦面から比高差40m程であるが川



Ⅱ－2 將軍塚古墳



Ⅱ－3 海道北山古墳



8図 柳沢・有旅古墳群分布図 (1 : 10000)

- 1 布施塚2号古墳 2 布施塚1号古墳 3 布施塚3号古墳 4 瀬原田古墳 5 海道北山古墳 6 柳沢古墳
 7 山畑新田古墳 8 藤塚古墳 9 上大久保古墳 10 北石津古墳 11 六部塚古墳 12 駕籠石古墳
 13 將軍塚古墳 14 南石津古墳

中島扇状地が一望できる。直径25m超・高1.5m程の円墳と推定される。主体部・遺物等は確認されていないが、占地・規模からして柳沢古墳群内では古式に属するものと推定される。

5 海道北山古墳 布施五明海道北山1292の果樹園内にある。墳丘は全くなく、横穴式石室の側壁のみを残す(Ⅱ-3)。「側壁はかなり厚い平石を立て並べて玄室及び羨道を構成している。深さは不明瞭であるが、幅は2m程で、羨道との境に袖石あるいは仕切石はなく、わずかに狭めて、玄室と羨道の区画を示す程度にすぎない。更級郡においてこの式構造の古墳は、この海道北山古墳1基あるのみである。」 米山一政『更級埴科地方誌』第2巻 昭和53年

6 柳沢古墳 柳沢地籍の台地上に3基の円墳が所在したと伝えられるが、現在確認することができない。地形的には幅広の舌状台地であり、眺望も良く古墳立地に適している。

7 山畑新田古墳 篠ノ井二ツ柳山畑新田地籍の山腹にある。直径5.0m・高1.6mの円墳と推定される。

8 藤塚古墳 山畑新田古墳の北の山林中にあり、山腹台地先端に位置する。直径16m・高さ2.5m程の円墳であるが、主体部は不明である。

9 上大久保古墳 篠ノ井岡田上大久保2770の山腹平坦地に位置する。円墳と推定され、横穴石室の天井石と側壁の一部を残すにすぎない。

『長野県史』によれば、柳沢古墳群内にこの他大平古墳群3基が見える。柳沢古墳群と同様既にその姿が見えない。有旅古墳群に見られるようにこの地でも果樹園の造成が進んでいるため破壊されたものと考えられる。有旅古墳群と比較すれば、横穴式石室がより大型である点、瀬原田古墳のように大型円墳の存在から先行した古墳群といえる。しかしこれらを構築した人々の生活跡が今の所確認されていない。



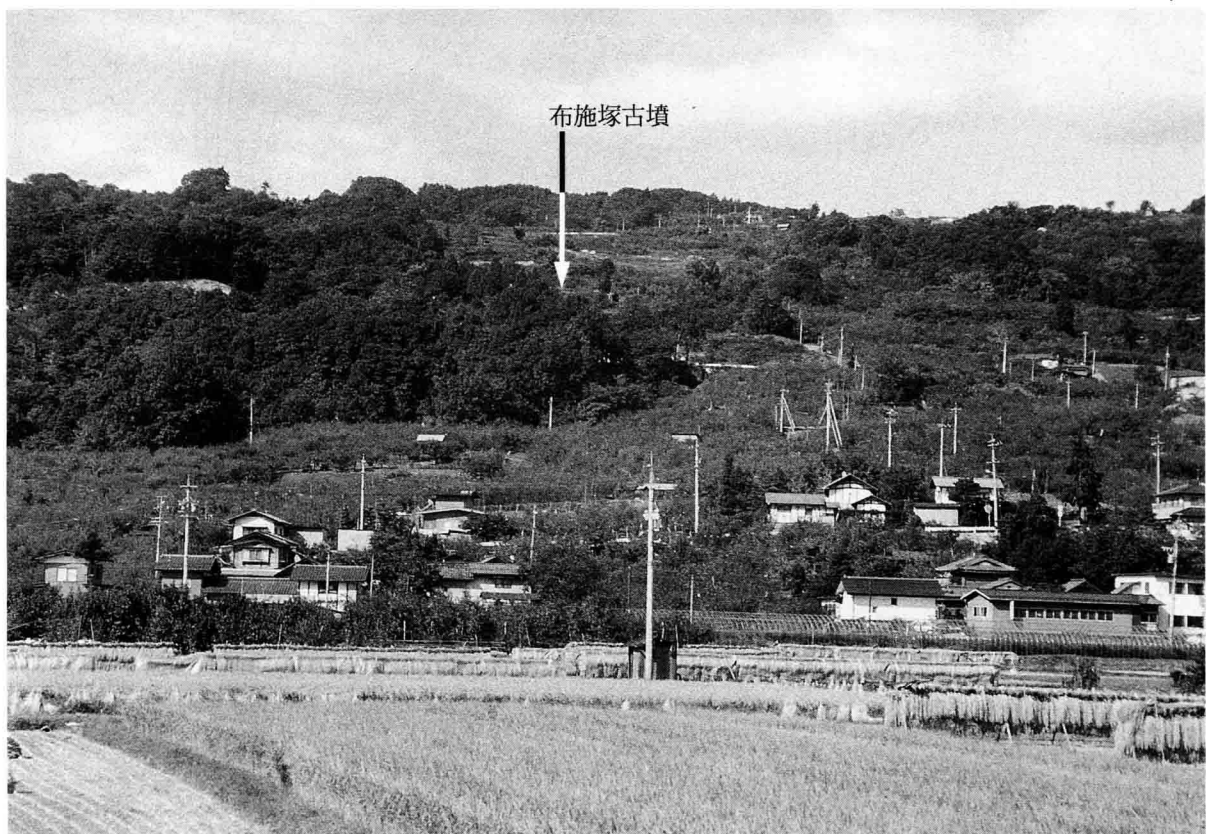
Ⅱ-4 沖積地と東傾斜面

Ⅲ 調 査

1 調査地と地形

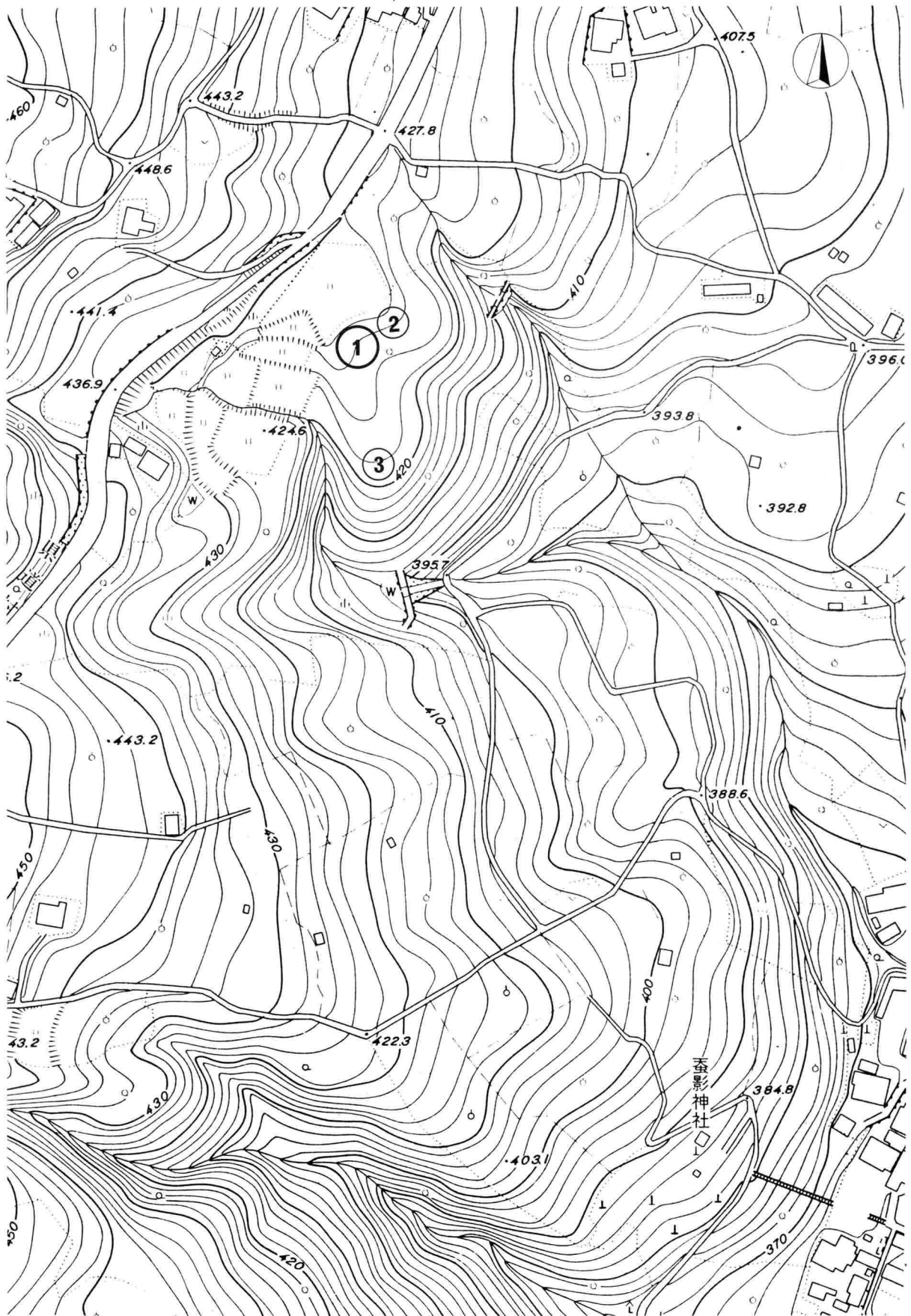
布施塚古墳群が占地する地形は複雑な様相を呈する。緩傾斜して来た地形が県道村山篠ノ井停車場線を境に平坦化し、東側に押し上げたような瘤状の山塊になり、更に南に50m程の尾根が突出する。山塊は幅約100mを測る規模のもので、両側が瀬原田沢（入沢）により切断され孤立山塊になる。それ故に俗称「代官山」と言われるように周辺唯一の小山である。代官山・小尾根の南から東側は平均斜度約60°の急傾斜を有し、下方の緩傾斜面に接続する。30年程前まで果樹園として地目利用されていたが、現在は唐松・雑木が樹立してしまったため直接には川中島扇状地を望めない。急斜面が扇状地側にあたるため、眺望は最良の位置にある。

1号古墳は代官山山頂にあり、背部の水田面からの比高差は約3.3m測り、山麓平坦地との比高差は約60mになる。2号古墳は1号古墳に接して北側に位置しているため、1号古墳を後円部と擬せられ、2号古墳を前方部とし両古墳を合わせて前方後円墳と考えられた時期もあった。2号古墳の墳頂は標高429.6mで1号古墳より1.4m程低い。今回新たに確認された3号古墳は南方に突出する瘤尾根先端に位置し、標高422m付近にある。1号古墳との比高差は約9mである。



Ⅲ－1 布施塚古墳群遠景

（古墳は唐松や櫟等の雑木林に覆われ、東側はもとは果樹園であったが、あまりの急傾であるため雑木林化して現在に至っている。左側山腹雑木林内の白禿部は地すべりによるもので、大平古墳群が所在していたという。）



9 图 布施塚古墳群周辺地形図（1：2500）



Ⅲ－2 布施塚古墳近景



Ⅲ－3 布施塚古墳近景

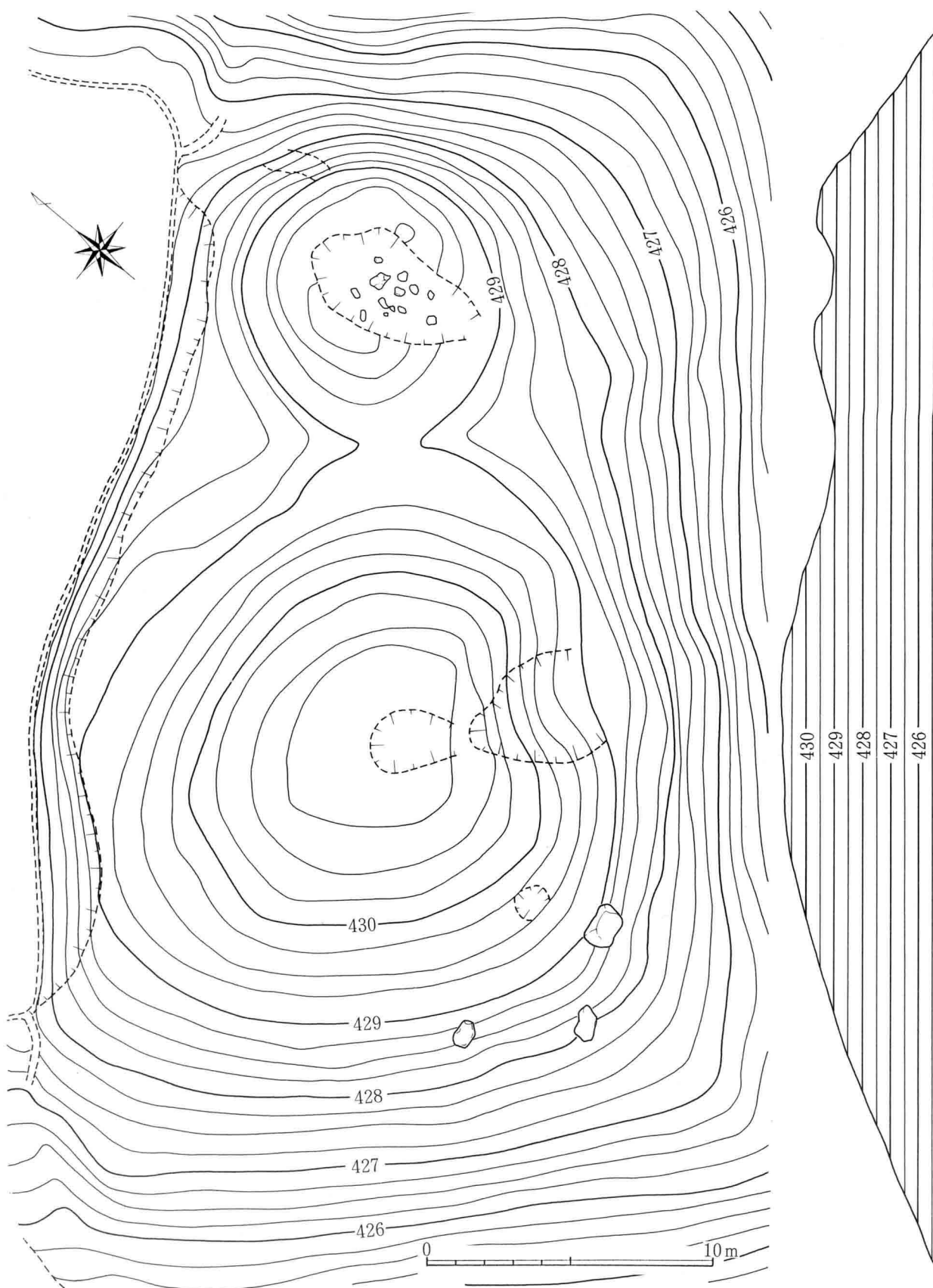
2 1号古墳の遺構と遺物

(1) 墳丘 昭和55年12月に長野県史編纂事業の一環として測量調査が実施され、従来考えられて来た前方後円墳というよりも2基の古墳が群集するものとの考えを裏付ける資料を提示した(10図)。実地測量調査を担当した蒲原宏行氏等は調査論考の中で1号古墳の墳形を「大まかに言って隅丸三角形の平面形」を呈し、「南西部の斜面はほとんど丸味を有さず」「傾斜も墳丘断面図でわかるように自然地形の傾斜そのままであり、傾斜変換による墳丘範囲の確定は難しい」としながらも直径約20mの円墳としている。また標高428.5～428.75m付近には拳大の円礫が所々列をなすごとく顔を出していたという。墳裾は前方後円墳との範疇の中で標高428.5m付近を推定し、そうした意味から全長32m、後円部径20m・同高2.4m、前方部推定復元幅14m・同高1.3m規模を予想している。蒲原宏行・高崎光司・滝山雄一「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』31巻12号 昭和54年、岩崎卓也「布施塚古墳」『長野県史(考古資料編)』昭和57年

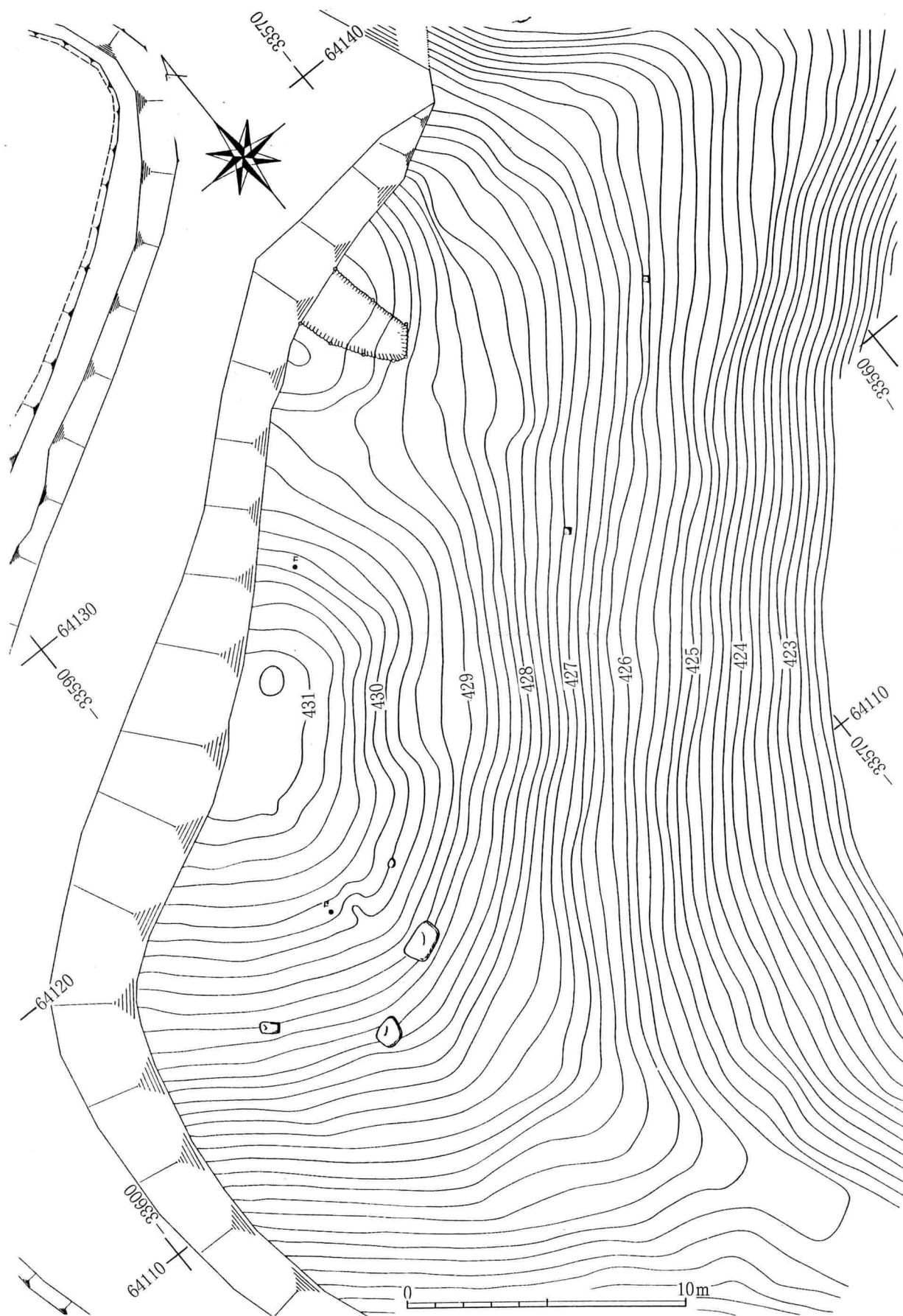
調査着手前の笹藪・低木・腐葉土等撤去後の地形測量図(11図)によると、南から西への等高線間隔が一定の幅をもって廻り込むのに対し、西端に至って標高429mラインを境に下方は外開気味になる。北斜面429.6mを境に同様なあり方を示す。この地形図でも蒲原氏等が指摘されているとおり北東斜面の等高線が屈曲が認められ、また南東斜面にも緩やかな屈曲が見られ、等高線を一瞥するに隅丸方形を呈する。しかし工事用道路削平前の地形図(10図)を見る限り西側の等高線は丸味を帯びている。墳頂部は長軸6m程が平坦になっており、中心付近には盗掘坑と思われる若干の窪みがある。墳丘上には南斜面に点在する大きな自然石の露出を見る他は全くとも言って良い程礫等が確認されない。ただ基準点T2近くに人頭大の礫が浮石様にあったため横にCトレンチを設定したが列をなす石は見られなかった。



Ⅲ-4 1号古墳墳丘(北東より)



10図 布施塚古墳墳丘地形図 (1:200) (『長野県史 (遺構遺物編)』より)



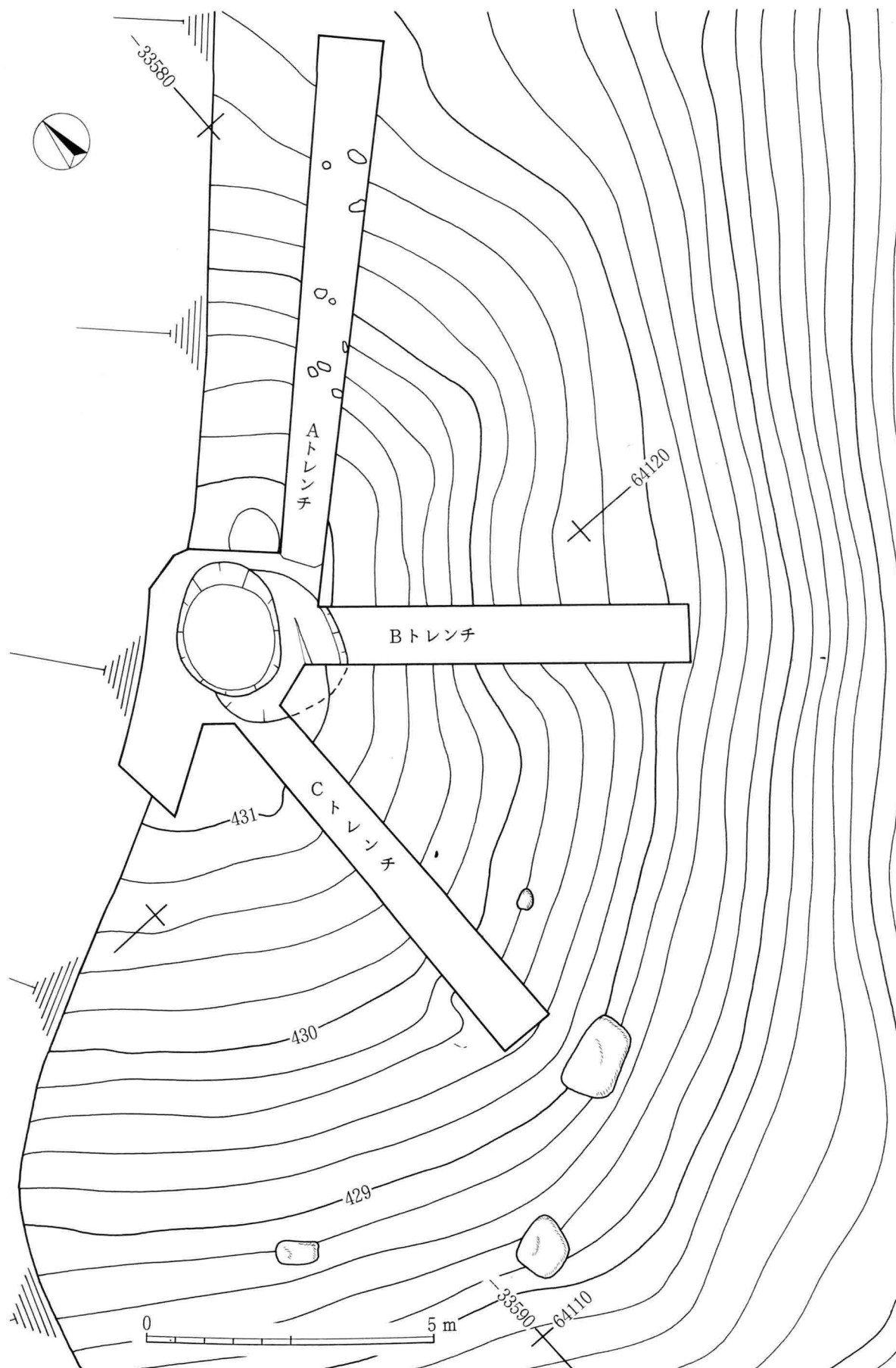
11图 布施塚古墳地形図 (1 : 200)

調査はA～Cの3本のトレンチを設定した(12図、Ⅲ-5)。墳頂付近は15～20cm程の軟弱な被覆土で、その直下は茶褐色粘質土となり、Aトレンチのみで角礫が認められたのに対し、B・Cトレンチでは全く認められない。Aトレンチにおける角礫は地山に接して標高430.6m以下に散在し、石列形態にならない。また葺石とも考えられない。上部3個の人頭大の自然礫は等高線に沿って据え置かれた感があり、これを墳裾部の根石とすれば10m超の小さな墳丘になる。ちなみに自然礫を多く混入する粘土質の古期崩積堆土上に20cm内外の黒色粘質土層が乗り、更に茶褐色粘質土層の層序になる(13図、Ⅲ-6)。またトレンチ内においても、後世の掘削と思われるBトレンチを除き地形変換点等は確認されない。しかし土層において注目すべき所見を得た。基盤層上部の黒色粘質土は墳丘北半分を覆っていたようで、A～Cトレンチの調査では確認されない。Cトレンチの墳頂で認められるものの墳丘斜面にない(14図)。また盗掘坑により定かではないが基盤層はBトレンチ墳頂東端が盛り上がるように高まりを見せる(Ⅲ-8)。黒色土はこの地点まで至っていない。この点に注目すれば基盤層は西傾斜面を呈し、もともとは土饅頭形でなかったものと推定される。また墳丘断面における黒色土層の両端は墳丘斜面に堆積することのないことから切断されたものと考えられる。更に東側斜面と他斜面の墳形が異なることについては先に触れた所である。前者が隅丸方形状を呈するのに対し西側は円形に近い等高線を描く。あえて推定すれば北・南斜面を削り落とし、その削土をもって西側の墳形を整えたのではないかと言うことである。このために墳丘における地形変換点を形成せず、また墳裾部根石を必要としなかったと考えられる。墳丘南側に点在する3個の大石は墳丘整形の際に掘り出されたものと考えられ、南側墳裾を推定する上で重要な手掛かりを示唆している。以上のことから1号古墳の規模を推定すると南は標高429m、北は同高の2号古墳との地形変換点に求め、北東・南西軸間20m・高さ2mである。

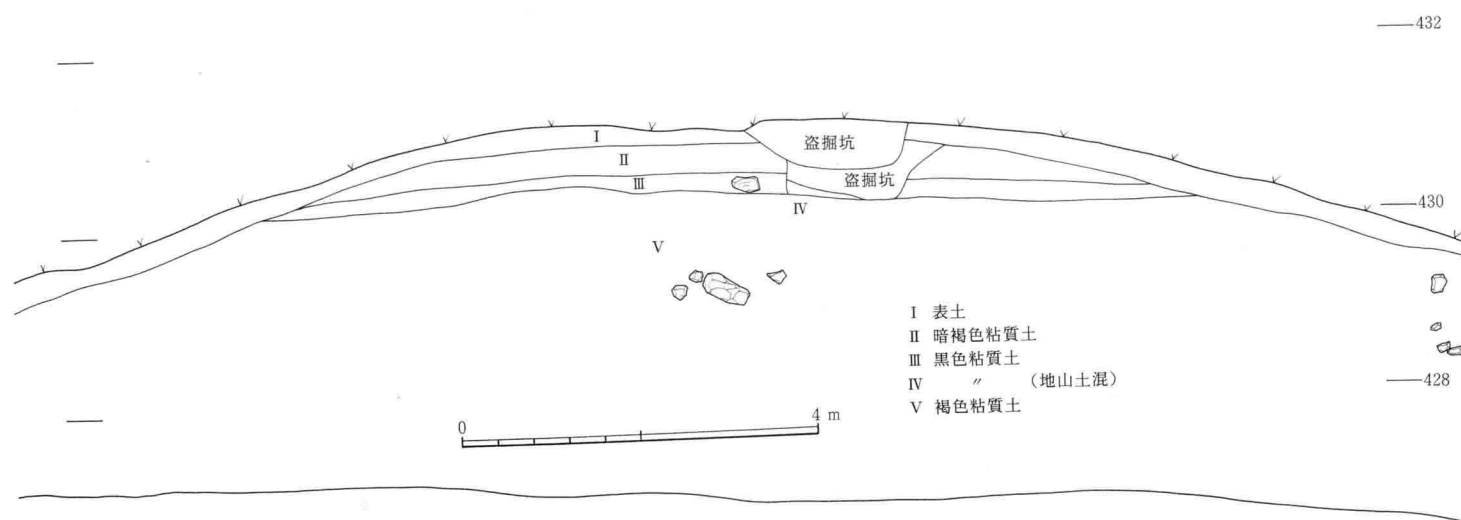
(2) 主体部 少なくとも3次に亘る盗掘を受けている。第2次攪乱とした盗掘坑は調査時の底面で長軸2.3m・短軸1.8mの楕円形を呈し、黒色粘質土下部まで及んでいる。現地表面より95cmを測る。第1次盗掘坑は最大幅3.2m、第3次盗掘坑は3.5mと推定され、黒色土上面まで掘り込まれる。このため主体部は全壊してしまっている。削平による古墳断面に見られる黒色土層帯が整然とあることか



Ⅲ-5 Aトレンチ



12図 1号古墳トレンチ等配置図 (1 : 100)



13図 1号古墳断面土層実測図(1:80)

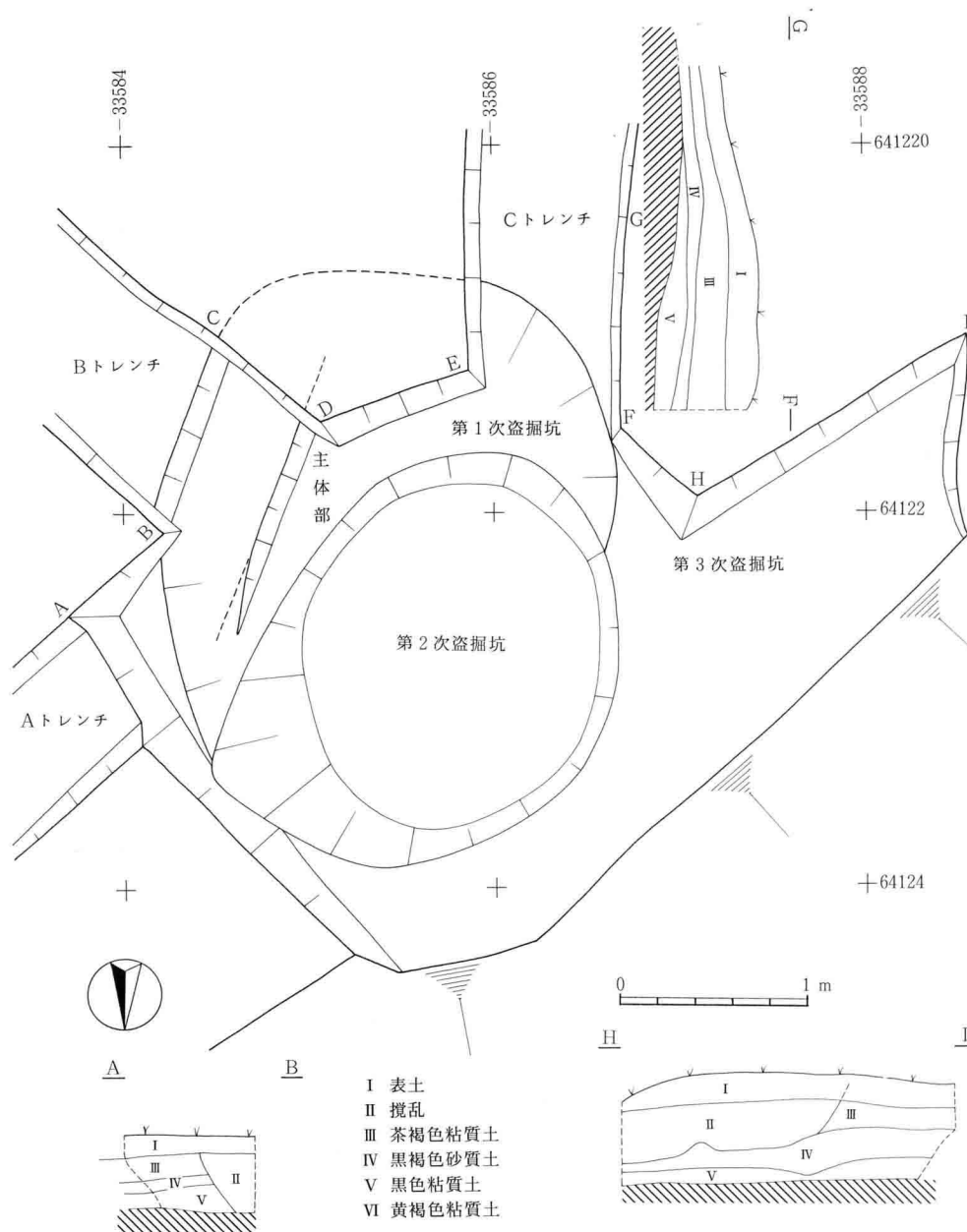


Ⅲ-6 1号古墳断面

ら、第2次盗掘坑から遺物の出土がなかったならば、古墳としての認定が困難であったであろう。墓墳であろう掘り込みの確認は第1次と第2次盗掘坑東側の中位のみに残存する。掘り込みは数cmにすぎず、1.1m程の直線を呈する。軸線はN22° Eを指す。埋没土は黒褐色砂質土である。規模等は不明である。これが主体部とすれば、礫・石等が認められないことからして木棺直葬と考えられる。



Ⅲ-7 主体部第2次盗掘坑



14図 主体部盗掘坑実測図 (1 : 40)



Ⅲ－8 主体部東側盜掘坑（第1次）

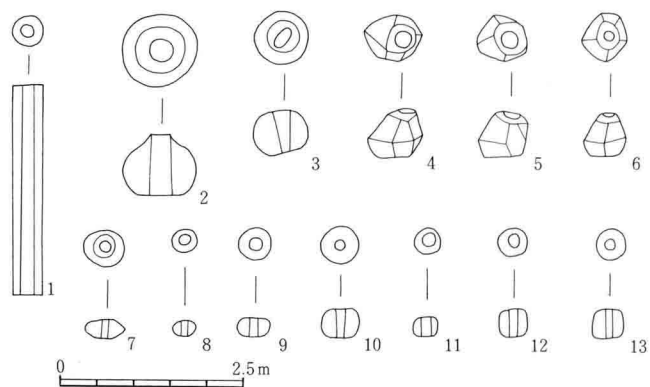


Ⅲ－9 主体部南側CD壁盜掘坑（第1次）



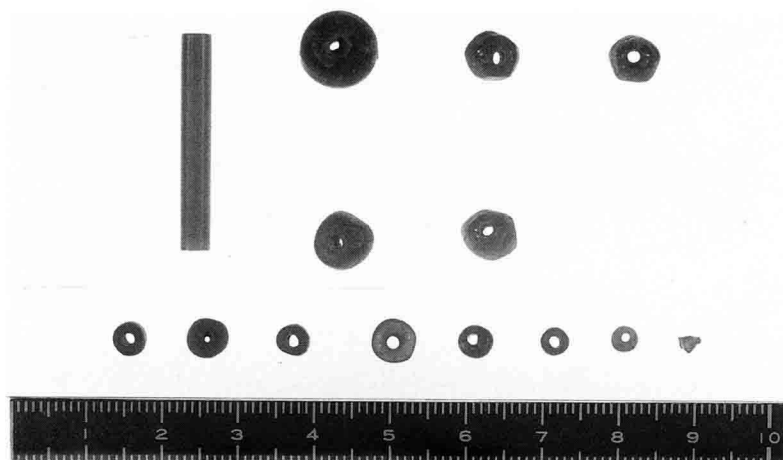
Ⅲ－10 主体部南側H I壁盜掘坑（第3次）

(3) 遺物調査では管玉1点とガラス小玉2点が確認され、他は2次盗掘坑内の土壌を水洗浄して得た。全て玉類で管玉1個・ガラス玉12個の内訳になる。楕円形を呈するガラス小玉は不揃いであり、平面形（直径）よりも立面の方が高い数値になるもの（11・12）、算盤玉形のもの（8）もある。2～6は大形で、4～6は不整形な面を形成しており、面境は鈍い稜をなす。2～6の穿孔は片面が大きく、逆面が小さくなる。粗型のガラス玉をもとに後からの穿孔方法がうかがわれる。この他にAトレンチ下方から黒曜石片が2点出土している。



15図 1号古墳2次盗掘坑出土玉類実測図（1：1）

番号	種別	材質	色調	直径 mm	長 mm	備考
1	管玉	凝灰岩	淡緑灰色	4.0	2.85	
2	ガラス玉	ガラス	コバルトブルー	1.0	7.75	両面磨耗
3	"	"	"	6.5～7.5	6.5	片側穿孔
4	"	"	ブルー	6.5～7.0	6.25	片側・面取り
5	"	"	"	6.0	6.25	" "
6	"	"	"	6.0	6.0	" "
7	ガラス小玉	"	ライトブルー	5.0～5.5	2.5	算盤玉形
8	"	"	"	2.5	2.5	
9	"	"	コバルトブルー	3.5	2.5	
10	"	"	ライトブルー	5.0	4.5	
11	"	"	"	4.0	3.5	
12	"	"	"	3.5	3.5	
13	"	"	"	4.0	4.5	



Ⅲ-11 1号古墳2次盗掘坑出土玉類

3 2号古墳の遺構と遺物

(1) 墳丘 10図の地形図を見ると南側で標高428.75m、北・東側で428.5mの等高線がきれいな円弧を描いている。東側の勾配が急傾斜であるのに対し、西側はやや間延びする。墳頂は長さ6m・幅3mに及ぶ盗掘坑がかつては認められたが、調査時では長さ4m・幅2mの規模である。墳丘上は角礫による葺石で覆われていたと推定されるが、調査では散在する程度である。墳裾の根石部配列が確認されたのは西端部と東端部の一部分にすぎない。西端部は墳丘断面に4個の石が配列され、東端部では緩やかな弧を描く配石が2.4mを測る規模にすぎない。この東西間は9.5mである。現存墳頂は根石下部から西側で0.9m、東側で1.3mの高さになる(16図)。

(2) 主体部の構築 工事用道路の開削によって墳丘の北半分程が消滅し、構築断面を見ることができる。古墳築造前は小山状を呈していなく平坦に近い地形であったようである。基盤層は築造にあたって石室主体部位置を若干窪める他に、東に幅1.1m・深さ0.4m程の周溝状落ち込みが認められることを除けば手を加えられていない。少なくとも6層の版築によって古墳盛土造成を行い、その後上面幅4.5m・下面3.8m・深さ1.2～1.3mの墓壇を掘り込み、主体部石室を構築し、裏込に大小の円・角礫と土砂を充填し完成する。西端の根石は上方のものが若干ずれているが、当初は3段積と考えられる。主体部主軸と若干東傾するが根石と周溝状掘り込み間は10.2mである。周溝状掘り込みは樹木抜根による攪乱により追求できなかったが、東端根石部では確認されなく、西端から東端にかけても巡っていない。また東側壁外方の控積部に垂直に土壇が掘り込まれ、底部に角礫をも残す。地山面から0.82m・現地表面から2.05mを測る。断面形態はV字状を呈するが側壁側は垂直になる。側壁に沿った施設か、単に土壇状のものかは不明である。明らかに古墳築造時の所産であり、排水用と考えられる。



Ⅲ-12 2号古墳調査前墳丘(南より)



16図 2号古墳平面実測図 (1:80) (コンター10cm)



Ⅲ-13 2号古墳墳丘断面 (北より)



Ⅲ-14 2号古墳葺石（南西より）



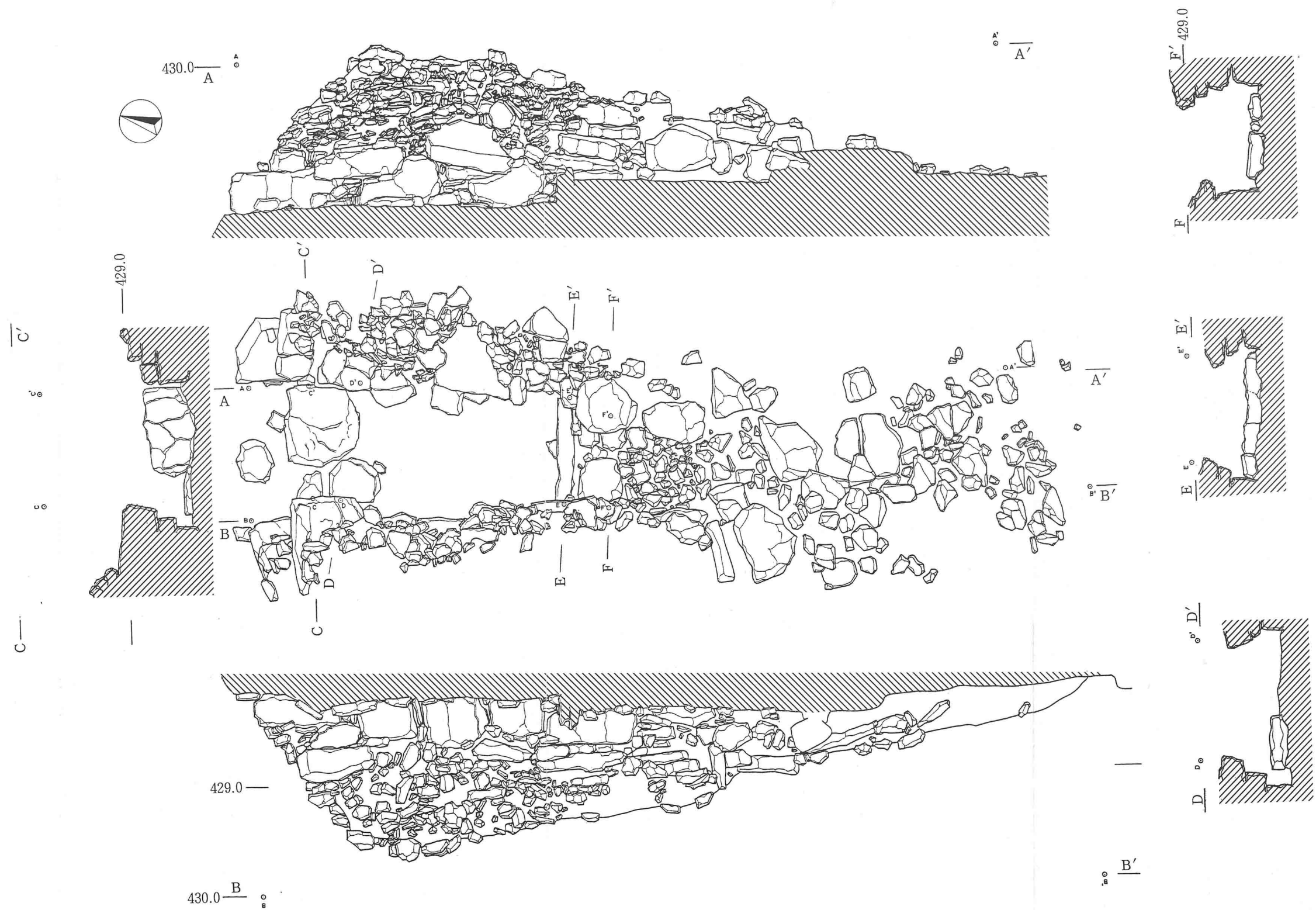
Ⅲ-15 2号古墳葺石及び東側根石（南東より）



Ⅲ-16 2号古墳東側控積み及び版築土層



Ⅲ-17 2号古墳西側版築土層及び根石



17图 2号古墳石室実測図(1:40)

(墳裾部の調査)

1号古墳と2号古墳との地形変換線に添って幅約1mのトレンチを設定した。西側から南にかけての地山面は平坦に近い傾斜を有する。墳頂部西下方で覆土が厚く50cm程になり、それ以南漸減し、前庭部付近では地山面と接する。地山面には葺石と想定される扁平角礫が散在している。恐らく古墳構築後それ程時間が経過していない段階での崩落と思われる。しかし、覆土下層から鉄製武器類・土器類が出土していることから、盗掘時の所産とも考えられる。このトレンチ調査では、西端あるいは東端部で確認される自然礫の根石は検出されない。Ⅲ-18に見られる大石は地山からの露出石と推定される。

(西端の根石)

人頭大超の自然礫が用いられ、少なくとも3段積みと思われる。これより南側には認められず、破壊された墳丘北側に展開していたものと予想される。



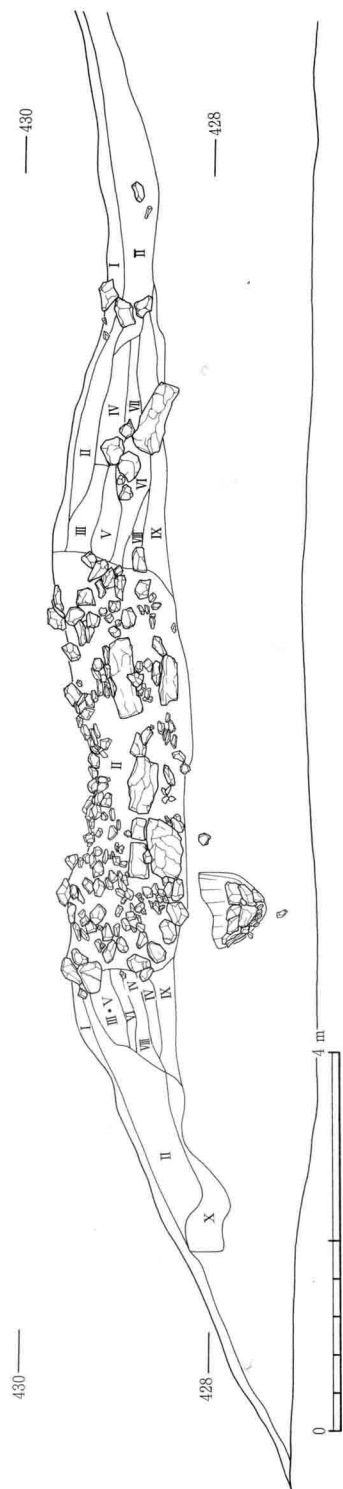
Ⅲ-18 墳丘西側のトレンチ調査



Ⅲ-19 西端の根石

(3) 前庭部 羨道部を横断する形で大石3個が配され、その間を角礫をもって封鎖する。大石及び角礫は斜方向に張り付けられる点特色があり、他の葺石とは異なる。封鎖石以南の前庭部は他と同様角礫が散在し特別な施設を構成しない。

(4) 主体部 (17図) 無裾形横穴式石室構造で、主軸方向はN16° Wを指す。2個の框石より石室と羨道を分離する。框石は全長1.16m・高さ約30cmを測り、基部は地山へ埋め込まれる。東壁からは一枚石が用いられ、西壁部の不足分を長軸20cm程の角礫で補う。



18図 2号古墳断面実測図 (1:80)



Ⅲ-20 前庭部から主体部を望む

羨道部 石室構造になるものは西側壁で框石より1.25mの位置までである。東側壁は1列4段積みを残存するのみで他は破壊される。石積の方法は玄室と同様である。底面横断法量は南端で0.8m、框石付近で0.95mである。残存最高高は0.75mを測る。床面は框石部で扁平角礫が用いられ、他は拳大の角礫が敷き詰められる。

玄室 底面における平面形態は直線的な羽子板形になるものと推定される。ちなみに横断の規模はC軸間1.3m・D軸間1.3m・E軸間1.2mを測る。側壁の側面は60~70cmの巨石をもって構築され、長軸方向は控積み部に埋め込まれ、短軸面を側壁面とする。調査では3段の側壁石を確認したが、高さが50cm程にすぎず、上部側壁石は天井石とともに抜き去られたものと考えられる。両側壁ともに地山に直接据え置かれ、持ち送り式に内部に張り出す。C~Eの横断面を見るとその勾配は急で、高さ1m内外で両側面が接する状態である。築造時の形態を留めているものとは考えられず、上部側壁石・天井石の抜き取りによる控積み部からの押し出しによるものと推定される。西側壁の前方部基層石3個は縦長の石を配するのに対し、それ以北及び東側壁は長方形面を側面とする。玄室の北半分は工事用道路開削により破壊を受けており、その全容は知り得ない。残存玄室は3m程を測る。破壊された側壁石が6個残存していたことから、3段積みとすれば破壊部は1.5m前後が予想され、現状に多く見られる2段積みとすれば2.0mで全長5m内外規模と予想される。奥壁の構築石材は見受けられず、側壁抜き取りの際に撤去されたものと思える。それ故に玄室の高さは推定されない。残存側壁高の最高は0.8mである。ただし、数段積みの鏡石も考えられる。底面は扁平角礫が敷き詰められ、その上に玉砂利が敷かれていたようである。調査時ではほとんどが撤去されており、羨道部覆土にその用材と思われる大形の扁平角礫が不定方向に認められ、また玉砂利は墳頂から多く確認され、墳裾地山覆土にまで散在していた。玄室内では中位に立ち上がり気味の大石が残存するが、抜き取られなかった床石である。この他に両側壁直下付近に残存床石が認められ、その上から鬼箆一杯分の玉砂利を得た。



Ⅲ-21 封鎖石及び前庭部



Ⅲ-22 羨道西壁及び床面



Ⅲ-23 羨道東壁及び床面



Ⅲ-24 玄室正面

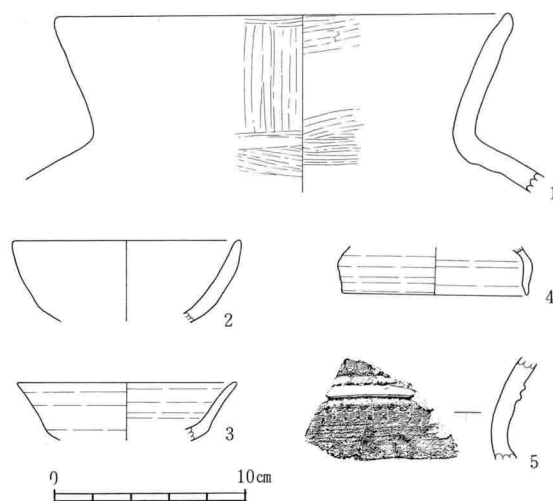


Ⅲ-25 玄室西壁及び床面



Ⅲ-26 玄室東壁及び床面

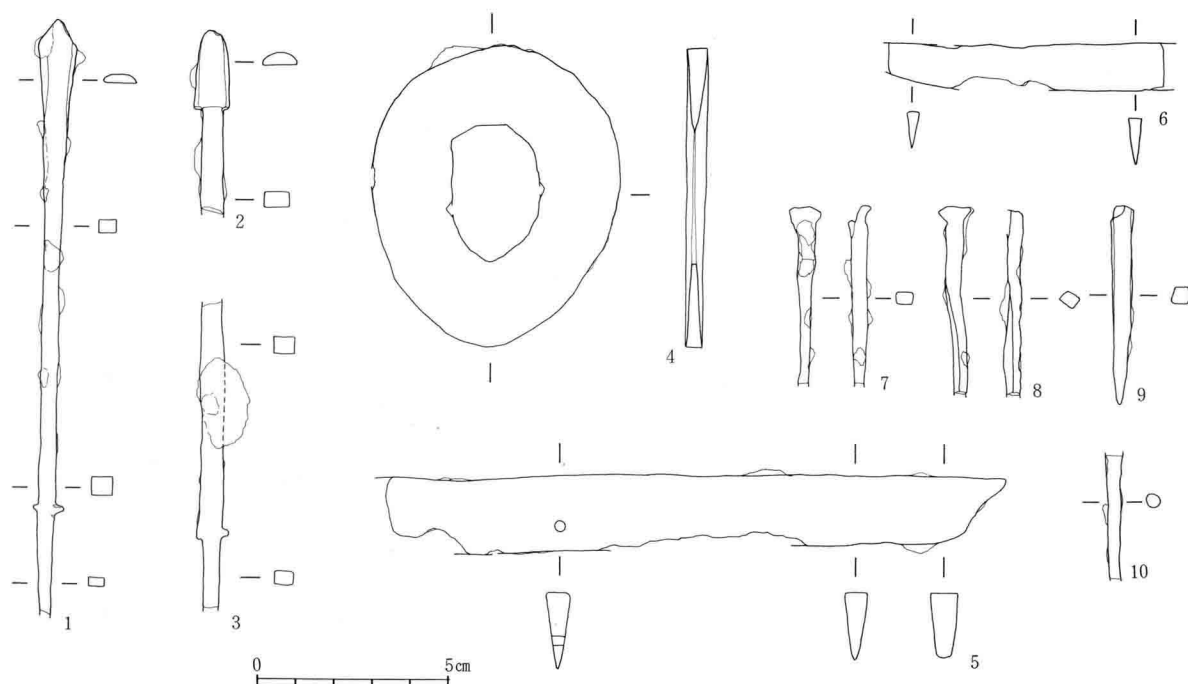
(5) 遺物 土器類は石室覆土・墳丘・前庭部・墳裾覆土から出土するが、総量にしてポリ袋(30×30cm)5個にすぎない。それも小破片のものが大多数を占め、器形を復元できるものは図示した4点にすぎない。器種には土師器甕・坏・高坏、須恵器坏蓋・坏・壺がある。19図1は大形甕に属し、羨道部及び前庭部から口縁部付近が集中して出土した。体部下半片は西側トレンチ覆土内からの出土が目立ち、特に西端根石部東側の1号古墳Aトレンチ最底部の地山に接しての出土であった。器壁が1cm近くもあり埴輪片かと思われたが、胎土の観察から同一個体であろうと推定した。蒲原氏等の論考に見られる「埴輪片」はこの土器であろうと思われる。内外面ともヘラミガキが施される。暗茶褐色を呈し、焼成は軟弱である。底部の破片は検出されない。2は碗形を呈する坏で、玄室からの出土である。器面は荒れているが、内外ともヘラミガキが施される。3～5は西裾覆土からの出土である。2・3は白灰色を呈し、3は体部から口縁部が外開する器形になり、2より後出のもので奈良時代の所産と考える。4の坏受口縁部・体部の屈曲は明瞭な稜をなさない。口径が10cm程の小形のもので、壺蓋とも考えられる。5は壺形態になるものと考えられる頸部の破片である。細かい2帯の波状文間を一本の凹線が巡り、両端は鋭い稜を形成する。体部・底部破片は確認されない。この他甕形土器の体



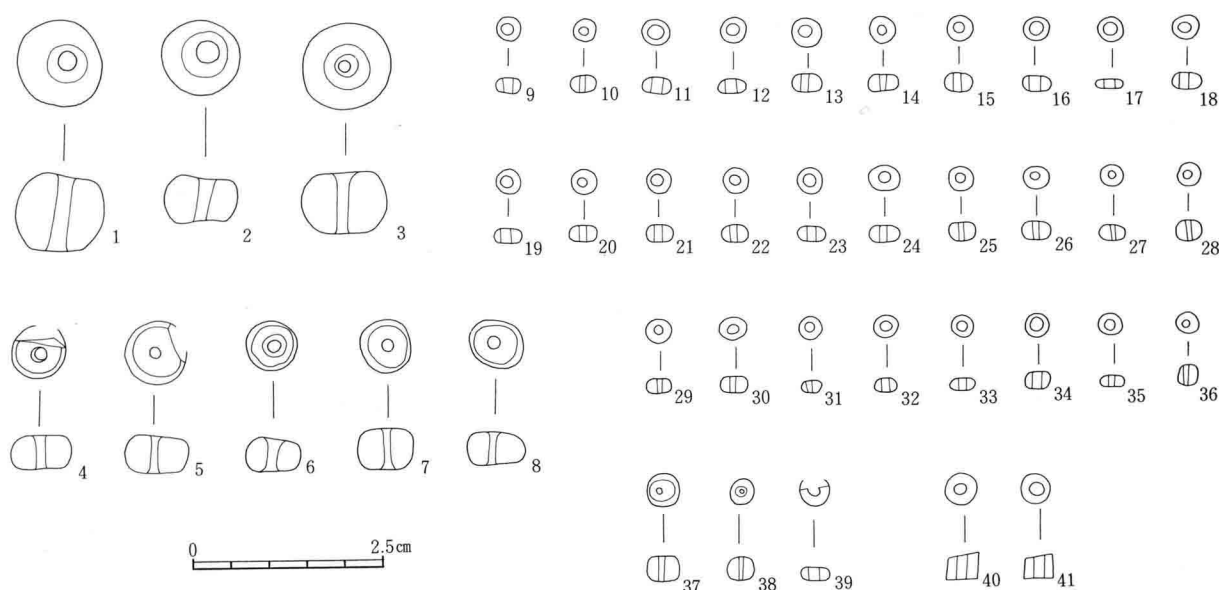
19図 2号土墳出土土器実測図(1:4)

部破片が墳丘全体より出土しており、外面に叩き目、内面に青海波文を残す。3と同時期の所産であろう。3を除くものは古墳築造時の遺物と考える。

鉄製品 20図6～9は墳丘からの出土で、他は西側墳裾覆土からの出土である。鉄鏃は長頸棘篋被形式のものであるが、鏃身部に2形態ある。1は片丸造鑿箭形を呈し、鏃身と篋被部を分離する関を有しない。2は片丸造柳葉形のもので篋被部を形成する。1・3の茎部は長方形を呈する。6は刀子で両端を欠く。5は直刀の茎部と推定され、目釘孔が1個穿たれる。4は鐔で倒卵形を呈する。7～9は釘で頭部が屈曲し、身部断面は方形を呈する。10は断面が丸味を帯びていることから鉄鏃の茎部の可能性がある。



20図 2号古墳出土鉄製品実測図(1:2)



21図 2号古墳出土玉類実測図(1:1)

玉類はすべて玄室の北端床面敷石下土壌を水洗いすることによって得た。種別には石質不明の丸玉（21図1～3）・土製丸玉（練玉）（4～8）・滑石製白玉（41）・ガラス製小玉（9～40）・ガラス製白玉（40）に分類される。石質不明の丸玉は暗茶褐色を呈す。硬い石材で両端は玉ずれによるものから窪む。土製のもの（練玉）は炭素吸入により黒色を呈する素玉に黒漆が施される。両端は磨耗して平坦になる。ガラス製小玉はコバルトブルーのものが多く、淡緑色・ライトブルーのものがある。

土器類（19図）

番号	種 別	器 種	法 量 <i>cm</i>			遺存	調 整 等
			口 径	底 径	器 高		
1	土 師 器	甕	24.0			1/8	内外面ともヘラミガキ石英粒多混
2	〃	坏	12.1			1/3	〃 ・ 玄室覆土
3	須 恵 器	〃	11.6			1/3	ロクロ調整・白 灰 色
4	〃	蓋	10.1			1/2	〃 ・ 〃
5	〃	壺				1/8	〃 ・ 8本歯櫛・拗黒色

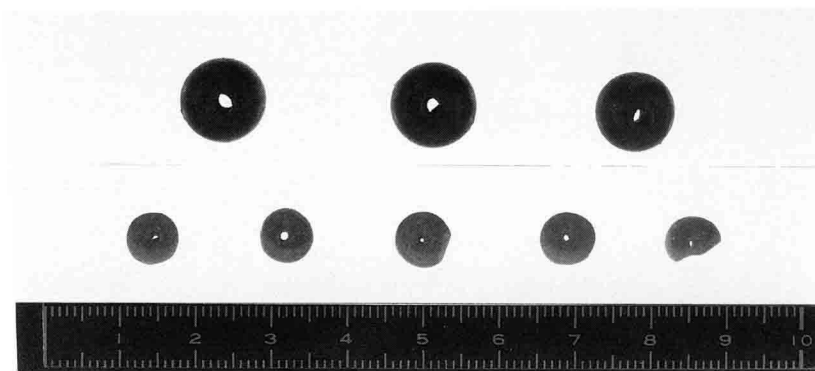
玉 類（21図）

番号	種 別	材 質	色 調	直 径 <i>mm</i>	長 <i>mm</i>	備 考
1	丸 玉	石 質 不 明	暗 茶 褐 色	12.0	10.0	両 端 磨 耗
2	〃	〃	〃	11.0	7.0	〃
3	〃	〃	〃	11.5	9.0	〃
4	練 玉	土 製	黒 色	7.0	5.0	〃 ・ 黒 漆
5	〃	〃	〃	8.0	5.0	〃 ・ 〃
6	〃	〃	〃	7.0	4.5	〃 ・ 〃
7	〃	〃	〃	7.0	6.0	〃 ・ 〃
8	〃	〃	〃	7.5	4.5	〃 ・ 〃
9	小 玉	ガ ラ ス	淡 緑 色	3.0	2.0	
10	〃	〃	ラ イ ト ブ ル ー	3.0	2.5	
11	〃	〃	コ バ ル ト ブ ル ー	4.0	2.0	
12	〃	〃	〃	3.5	2.0	
13	〃	〃	〃	4.0	2.5	
14	〃	〃	〃	3.5	2.5	
15	〃	〃	〃	3.5	2.5	
16	〃	〃	〃	3.5	2.0	
17	〃	〃	〃	3.5	1.0	
18	〃	〃	〃	3.5	2.0	
19	〃	〃	〃	2.5	2.0	
20	〃	〃	〃	3.7	3.0	
21	〃	〃	〃	3.5	2.2	
22	〃	〃	〃	3.5	2.3	

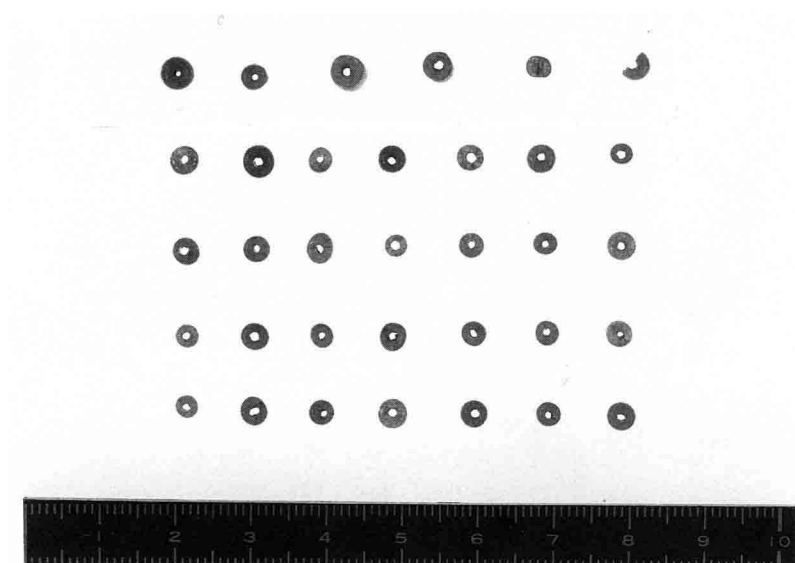
23	〃	〃	〃	7.5	2.0	
24	〃	〃	〃	4~3.5	2.0	
25	〃	〃	〃	3.5	2.25	
26	〃	〃	〃	3.5	2.5	
27	〃	〃	〃	3.25	2.0	
28	〃	〃	〃	3.25	2.25	
29	〃	〃	〃	3.25	2.0	
30	〃	〃	〃	3.25~3.5	2.25	
31	〃	〃	〃	3.0	1.75	
32	〃	〃	〃	3.0	1.75	
33	〃	〃	〃	3.0	1.75	
34	〃	〃	〃	3.0	2.25	
35	〃	〃	〃	3.0	1.75	
36	〃	〃	〃	2.75	2.75	
37	〃	〃	ライトブルー	4.0	3.5	
38	〃	〃	〃	3.0	3.0	
39	〃	〃	〃	4.0	2.0	
40	白玉	〃	スカイブルー	4.0	3.0~3.5	
41	〃	滑石	白灰色	4.0	3.0~3.25	



Ⅲ-27 2号古墳出土鉄製品



Ⅲ-28 2号古墳出土丸玉（上段）・練玉（下段）



Ⅲ-29 2号古墳出土ガラス小玉

IV ま と め

川中島扇状地を一望できる地形的な位置にあり、また山腹山頂に構築された古墳ということで古くから注目されていた古墳である。長野県史編纂事業の一環として墳丘測量が実施される以前は、腰村1号古墳（市史跡名称「腰村前方後円墳」）と共に川中島扇状地に対応する前方後円墳と考えられて来た。墳丘測量の結果、蒲原宏行氏等は前方後円墳にしては墳丘における平面形と断面形との矛盾、主軸線の屈曲等から2基の円墳が接続したものとの考え方を示した。小さい方の円墳（2号古墳）は扁平な小形石材を多用している所から竪穴式石室を、また大きい方の円墳（1号古墳）も低平な墳形から竪穴系の埋葬施設を予想し、築造年代を相前後したもので古墳時代中期後半から後期初頭を前後した時期を推定された。

当初、1号古墳の掘削断面の黒色粘質土が帯状に堆積し、主体部と想定できる掘り込みが確認されないことから自然堆積土塊とも思われた。調査では3次に亘る盗掘坑が確認され、そのうち楕円形を呈する2次盗掘坑は基盤層にまで達するもので、1次盗掘坑底面付近より管玉・ガラス玉の出土を見たことにより初めて古墳としての確証を得た。墳丘の断面に見られた黒色土がA～Cトレンチから確認されなく、西側斜面に展開するものとの予想、そして墳丘測量から北東・南西軸間の地形変換点が明瞭でない点、東側墳丘両端部の等高線がやや角張りを見せていること等から、北東・南西側が墳形を整えるため削り落とされ、その廃土を西側の不整円形部に盛土造成することにより円形墳の形態をなしたものと推定される。それ故に西部は土砂流失により墳形を乱し、平面形が隅丸三角形状を呈しているのではないかと考える。しかし、現状ではこれを立証する墳丘は残っていないのが残念である。墳丘整形のため測量図また調査からも墳裾を確定する資料が得られなかったが、南西部に点在する3個の大石から墳形整形外に存在するものと考え、これらを墳裾端とする。さすれば古墳の規模を標高429mを墳裾とし、北東・南西軸間20.0m、高さ2.0mと推定する。墳裾部根石・葺石等の配石は有しない。主体部の攪乱は著しく、墳頂全面に及んでいる。僅かに主体部土壌であろう数cmの掘り込みを確認したが、規模・形状等は不明である。攪乱土に小石・礫・粘土塊等確認されなかった事は木棺直葬によるものと考えられる。副葬品は管玉・ガラス玉の装飾品のみである。盗掘の見落とし品である。管玉は細身で、ガラス玉は紺色系を呈し、立面が高く、算盤玉形のものが含まれている等古式の様相が窺える。

2号古墳は1号古墳の北に隣接して構築される。墳丘の盛土は著しく流失しており、構築当時の規模、特に墳高は不明である。調査時での規模は東西軸間9.5m、墳裾部根石からの高さは西側で0.9m・東側で1.3mをそれぞれ測る。墳丘には葺石で覆れていたものと思われ、墳裾部及び主体部石室内に集石状態で埋没していた。主体部は無袖型横穴式石室であるが、墳丘同様破壊が著しい。框石により羨道と玄室が区画され、幅60～70cmの巨石を段積にして構築されるが、調査では羨道4段・玄室3段を確認したのみである。玄室の規模は推定全長4.5～5.0m、床底面幅1.2～1.3m、残存側壁高0.5mである。床面は平石が敷き詰められ、その上に玉砂利が覆っていたようであるが、側壁側にその一部が残存するにすぎず、他は盗掘により剥ぎ取られ、平石は羨道部付近に投げ込まれ、玉砂利は墳丘頂部から墳裾部にかけて認められた。この平石が露出していたため竪穴式構造の主体部と推定された可能性がある。主体部は少なくとも6層に亘る版築による墳形を造り出した後に構築される。東側壁石外に土壌状の排水施設と考えられる遺構が存在する。副葬品のうち玉類を除く他は主体部外からの出土である。特に鉄鏃・直刀・鐔等は墳裾覆土中からのものである。これからは盗掘の徹底さを窺い知ることができる。玉類は床石の大石以北の床面直上の堆積土を水洗浄して得たもので、集中しての存在である。玄室規模の推定の資料になろう。出土土器から築造年代・埋葬時期を推定すると、土師器のうち図示した甕・坏は善光寺平第Ⅲ様式（鬼

高式) 前葉、須恵器の蓋・壺は小破片からの判断であるが陶邑窯編年でT K47又はM T15に相当するものと思われる、実年代にすると6世紀初頭の築造と考えられる。他の土器は奈良時代に属し追葬の結果と推定する。鉄鏃のうち棘篋被片丸造鑿箭式はX期に出現し、陶邑窯編年T K43に比定され、6世紀末葉とする。近隣古墳ではこの形状の鉄鏃を多く出土している大室23号古墳の築造年代を7世紀前葉とされるが、本古墳では該期年代の土器は確認されない。ガラス玉は1号古墳より小粒なものが多く、紺系色が目立つが、淡緑色のものが1点あり、また練玉等があり、後出のものと考えられ、棘篋被形式の鉄鏃と同時期のものとして推定する。この推論が正しければ、6世紀初頭に構築され、7世紀前後及び奈良時代に追葬が行われたことになる。ただし、築造時における副葬品は確認されなく、古墳築造形態・墳丘出土土器により年代を推定している。

布施塚古墳群は3基の古墳をもって形成される。1号古墳は墳形の削り出し盛土古墳で木棺直葬の主体部を有するという希有な古墳で、築造年代を古墳時代中期に比定し、5世紀後半代に求める。これを盟主として次に、主体部構造が露出していないことから、1号古墳と同様主体部を推定する3号古墳、そして2号古墳の築造順次を考える。それも時間的推移は連続したものと考え、2号古墳は長野盆地における早い時期に横穴式石室を取り入れた古墳の一つであろう。その内容について蒲原宏行氏等は、両古墳の被葬者間には何か強い血縁的組紐の如きものがあつたと推論する。占地・築造年代等からこの推論を支持するところである。

〔参考文献〕

- 蒲原宏行・高崎光司・滝山雄一「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』Ⅲ・31-12 昭和54年
杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『樫原考古学研究所論集』8 昭和63年
大塚初重・小林三郎・石川日出志『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』東京堂出版 平成5年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 昭和56年

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふせづか1 とうこふん・2 とうこふん							
書 名	布施塚 1 号古墳・2 号古墳							
副 書 名	篠ノ井瀬原田地区都市対策砂防事業地							
シ リ ー ズ 名	長野市の埋蔵文化財							
シ リ ー ズ 番 号	第78集							
編 著 者 名	矢 口 忠 良							
編 集 機 関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒381-22 長野県長野市小島田町1414 Tel 026-284-0004							
発 行 年 月 日	1996年3月25日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
布 施 塚 1 号古墳	長野市篠ノ井 大字布施五明字 おぼん 1711-1	20201	E-112	36度 34分 37秒	138度 7分 29秒	19950619 ～19950828	200	都市対策 砂防事業
2 号古墳	"	"	"	"度 "分 "秒	"度 "分 "秒	"	200	"
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
布 施 塚 1 号古墳	古 墳	中期末葉			管玉1・ガラス玉12		木棺直葬 墳丘整形	
2 号古墳	"	後期初頭	無袖横穴式石室		土師器・須恵器 石製丸玉3・練玉5 白玉2・ガラス小玉32 鉄鏃2・直刀・刀子 ・鏢・釘			

長野市の埋蔵文化財第78集

布施塚 1 号古墳・2 号古墳

平成8年3月19日 印刷

平成8年3月25日 発行

編 集 長 野 市 教 育 委 員 会

発 行 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

印 刷 (有)長野プリントサービス